

政界の再編成と共和党の抬頭

The Political Realignment and the Rise of the Republican Party

山 口 房 司

(一) はじめに

内戦前史研究者の主たる関心は、北部と南部の相違がおこった理由とその分析、従って地域間闘争とそれが極点に達した内戦によって合衆国の政治制度が完全に崩壊するに至った点に注がれてきた。いわゆる内戦へのセクショナル・アプローチを重視する学派の驚くべき数にのぼる研究が、内戦前のアメリカ政治史の支配的位置を占めつづけたことがそれを示している。

このアプローチは、ほとんど一様に奴隸制問題を中核に据えるという傾向を伴った。地域間闘争、奴隸制問題は確かに重要ではあるが、それ以外の当時の政治的影響力——宗教、移民、経済等の諸問題を見放す乃至は軽視し、これらのいわばノンセクショナルな諸力が政治の場で演じた役割の重要性を正當に秤量しない危険性を指摘され出したのは、ようやく近時のことである。かくてたとえば1840年代末から50年代にかけてアメリカ史上、例をみないところの移民の大洪水と、それがもたらした文化的、宗教的圧力といった問題は、内戦へと至る道程において中心的関心事とは基本的に関わりがないと扱われるか、或いはより大きな地域間闘争の諸側面の一つとして処理されてきた。

その結果は基本的となる地域間闘争、奴隸制問題が圧倒的に内戦をもたらしたとする構図、またアメリカ人民がほとんど排他的にこれらの問題に専心したとする歴史像が提供された。

しかし合衆国の歴史を一貫して、アメリカ人民の政治行動は広汎で多様な諸問題、諸影響力に対応して形成され決定されてきたのである。すなわち地域的

或いは地方的な忠誠心がひきおこした事象、愛着を抱きその社会に基本的と考えた或る独特の制度を守り抜こうとする願望、経済的發展への関心、或る敵対的なグループの出現とそれが勢力を増大させることへの恐れ、などすべてが特定グループの政治的行動を決するに重要な役割を演じたのである。合衆国はメルティング・ポット概念とは逆に、実体的には今日まで多くの異なったそしてしばしば拮抗的な人々が、各々が自らの「願望を最大限に充足してくれる」と信ずる組織を獲得せんとして相争う異質的な社会であった。

このような社会にあって、多様なグループは利益をもたらす諸政策を推進しようとして行動し、或いはそのグループに有害と思われる施策に対し機先を制するよう行動する時、政治にと突入し、そのエンジンとしての政党を結成する。自己の願望を達成し、自覚されたる役目を果たすために、或いは社会にある他のグループに対して自己の地位を確保するためには、諸利益が同盟して一時的連合を結成することが、政府の政策を特別の方向に振り向けることを強いるに十分な力を得るためにはしばしば必要なのである。或る諸政策において一致しうる多様なグループ、或いは他の諸政策に抗して共同しうる多様なグループは、その利益を推進するために連合する。

かかる連合は、それを構成する多様なグループのどの利益、換言すれば如何なる政策に優先権を与えるかで合意に達しがたい時、また潜在的不一致について宥和策を模索する時には結成されることは容易でない。しかしそれへの敵対的諸力が強固である場合には、そのことのゆえに連合が可能でもある。共和党の誕生はまさにそのようなケースの好例である。

それは換言すれば共和党が如何に複雑多岐な構成因子から成るか、と主張するに等しい。そして共和党の誕生が、拮抗する民主党の変質をもたらした。新党の結成と旧来の政党の変質は、奴隸制問題にも変化を強要した。従って内戦前期の政治行動は複雑多岐であり、「奴隸制といえども何時でも、すべての人に圧倒的影響力を及ぼさなかった。さらに言えばほとんどの場合、大半の人心にさえも訴えはしなかった」、とさえ主張される。

確かに奴隸制問題を過大視し、それを内戦の唯一因とする過度の単純化は排されねばならぬ。しかしそれは依然として内戦原因論の主役の一つである地位

を譲りはしない。ただ附加さるべきは、その制度で表現される、或いは制度に借名する多様な側面への考察である。共和党は前述の如く多様な構成分子を包含していた。しかしその中であって、反奴隸制は党の金看板とも言えるものであった。たとえば揺籃期の同党が、初期の諸選挙の幾つかで目ざましい勝利を経験する傍らで、常に解党の危機感を覚えていたことは確かであり、そのような危機の時に最も声高く叫ばれたのは反奴隸制政党としてのアピールであった。たとえば1859年モルガンにおける共和党全国委員会は、次のような声明を発して危機克服の鍵を示してみせた。「共和党はその起源に Slave Power の攻勢に抵抗するという明白な必要性を有していた」、「Slave Power の態度は終始一貫して不遜であり攻撃的である……それは連邦政府を絶対的に支配することで満足しない……それは自由なる人民からの譲歩を要求しつづけている」。

ここで言う「反奴隸制」は奴隸制そのものではなく奴隸主の権力支配への反対であり、反南部政党としての共和党を性格づけている。また共和党は自由労働をその基本的立党精神とするとも解釈されきっている。しかしここに言う自由労働なるイデオロギーは、単に労働に対する態度だけでなく、内戦前の北部社会の正当性を含むとともに、連邦政府を支配し合衆国憲法をその目的のためにねじまげようと企んでいる Slave Power の存在の認識と、それへの抵抗を意味するものであった。従って自由労働のイデオロギーには常に幾分かの矛盾と曖昧さがつきまとっていたのである。

このように「反奴隸制」に内包される内容は奴隸制そのものへの反対、奴隸主権力への反対、さらには反南部的心情のいずれかの、またそれらすべての側面を含む広汎な——それゆえに可成りの程度に不分明なものであった。まさしく共和党はその多様な構成分子の総集計であり、むしろそのイデオロギーが広汎に受容された鍵はその多面的特質にあった。前述した異質的社会にあって、異なった価値や利害を巧みに融合させて党内各分子に様々な方法で充足感を与えたのである。それは北部における異なった社会的、政治的背景を糾合させ、史上はじめて道徳的コンセンサスを準備し、近代戦争に立ち向かうエンジンとなった。この意味において共和党の誕生とその性格の一般化は、その複雑さのゆえに多くの例外を含みこまざるをえないが、その究明はそれゆえにこそ内戦

因の過度の単純化を避けるに必須のテーマとなろう。

さらに次の自明の事実が共和党誕生の研究を要求する。すなわち南部の分離は1860年の大統領選挙で共和党が勝利したことへの最も直接的な反応であり、従って同党の誕生とその諸発展は内戦勃発に直接するからである。換言すれば二つの「全国的」な政党であったホイッグと民主両党間に展開された全国的なレベルでの競争から、圧倒的に南部支配的に変質した民主党と全く北部的な共和党との間の「地域間」闘争にと代替されたことが、ユニオン分裂の主要因だったからである。

大量の移民流入という大波をかぶりながら、そしてすでに幾度となく触れてきた西方テリトリーの奴隷制への開放さらには同制度の全国化を狙う奴隷主権力——その勢力は北部や西部の経済的要求、たとえばホームステッド法、河川港湾法に代表される内陸開発の欲求、自由労働とようやく幼稚産業の状態から抜け出しつつあるが依然、十分に保護される必要のある北部産業にとっての保護関税等々に対していた。この大きな阻害勢力にどう対処すべきか。Slave Power はこのような文化的、社会的、経済的諸要求に抗する巨大勢力であった。従って北部の反奴隷制運動は、奴隷制そのものよりも奴隷主権力に向けられたとする指摘は説得力を持つ。

さらに反奴隷制勢力が多様であり、一点への糾合は容易でなかったことを、いささかの大胆さをこめてその勢力を類型化することによりうかがってみる。それは北部および西部の運動が主として反奴隷主権力、反南部勢力的であったとする主張にさらに一つの信を加えるであろうし、また再建期への一つの見通しをも与えるであろう。

より注目を払われて然るべきであるのに、その地位をそれほど評価されてこなかった憲政史家、法制史家は、それにもかかわらず内戦史研究に注目すべき貢献をなしてきたと言わねばならない。彼らによれば反奴隷制派、奴隷制擁護派の双方がそれぞれ攻撃、防衛の努力を払うに当って、如何に合衆国憲法ならびに州法（たとえば人身自由法）、連邦法（たとえば逃亡奴隷法）、州憲法、モン・ローの意味を分析し、どう主張したかは重要である。そしてこのような諸努力が、合衆国がその上に築かれている連邦的合意を、どのように侵蝕してい

ったか——すなわち奴隸制は排他的に州管轄事項であり従って連邦政府は州におけるそれに干渉できない、とするコンセンサスが如何に崩されていったか、を解明すべしとしている。

これは合衆国憲法が不可侵のものであるか、常に生成状態であってその解釈が時の条件により様々に変化する性質のものであると解されるかによって、反奴隸制派の内部にも分界線を引くことの可能性を意味している。

すなわち反奴隸制派勢力を三分した基底に合衆国憲法を据えた最近の研究によれば、次の如き叙述が生れる。先ずギャリソン派は合衆国憲法が全くの奴隸制擁護的文書であることを正しくも認識し、そのゆえにこそ北部による連邦離脱を説いたとする主張がある。しかしそれは今日、修正されねばならない、と。

同派に対する従来の評価は、1787年から内戦までの間の公式的、一般的憲法史の軌跡上では一応の地位を占める。しかし合衆国憲法の中には解放指向性があり、先ずそれはアボリショニストによって視認され、後の世代が伸展させていったと言っているのである。

一方、穩健な(憲法)遵守派は反奴隸制の立場をとりながら、前述の連邦的合意を許容した。しかし連邦政府および自由諸州は、奴隸州の管轄領域外の地では何処であれ奴隸制を許さぬと主張した。これがアボリショニストとの分岐点であり、彼らが別個の反奴隸制政党結成を決意した原点であった。彼らこそ自由党、自由土地党さらに共和党結成の中核であった。彼らは南部諸州における奴隸制を保護した例の連邦的合意に固執したため、アボリショニズムに代えるにフリーソイリズムを採用することによって、「一畝の羹とひきかえに解放指向的遺産」を売った、とする評価には一面の真理がある。この論に従えば、チェイスのような原理から後退した政治的アボリショニストがギャリソン派から厳しい批判をうけ、訣別を招来したのも首肯できる。

さらに従来、一般的に言って、ほとんどの史家がとりあげてこなかった急進派の魅力も注目されて然るべきであろう。確かに当時、彼らのイムパクトはほとんど軽視さるべきものであったし、彼らの憲法論もしばしば「欠点だらけで不真面目」であったことも認めねばならぬが、その一方合衆国憲法が依然生成状態にあることを理解していた点で称賛すべきでもある。例の連邦的合意を捨て、

合衆国憲法や如何なる法よりも自然法が至高性を有すると主張しつづけることによって、彼らは平等主義の遺産を継承した。「法の適正なる手続、法の下での平等保護、市民権の至高性、市民の有する特典と免除といった思想はすべて先ず急進派により示唆されたものである」。

従って他の反奴隷制派が「アメリカの社会的現実が如何に民主的ゴールに届いていないかを思いださせる存在」として留まった一方、これら急進派の平等主義的思想が「再建期の憲政的發展における主流として流れこんでいった」のである。

とまれ反奴隷制勢力は多岐であった。このような多岐な勢力とゴールは、旧来のホイッグ、民主の二大全国政党の党機構や政治運営では吸収し、対応しきれぬことは明白であった。ここに新しい政党、新規な連合が必然される素地が生じた。その連合結成の困難さを救う一要素は、敵対勢力が巨大であることであった。

南部の連邦支配は幾らかのかげりをみせながらも依然強固であった。この Slave Power は何処に由来するか。1858年サムナー宛ての一書簡がそれを明示している。アメリカとブラジルの奴隷制を比較して曰く、「この国においては、奴隷制は政治勢力の源泉であるというのが事実なのです。それは経済的もしくは社会的願望物として養育され助成されたものではありません」、と。またマン (Horace Mann) に宛てた一書簡には、「私は永年の間 Slave Power (有権者の五十分の一にも満ちません) が如何に全合衆国を牛耳るをえたかを見て驚いているのです」、とある。さらに合衆国憲法第一条のいわゆる五分の三条項により不当に代表権を与えられていることに言及して曰く、「北部は蒸気力と水力を操ることができる。しかし南部は人間を操作しうるのである」、と。

チェイスや他の政治的アボリショニストも奴隷制を道徳的悪と見做したが、彼らをして攻撃に駆りたてた対象は Slave Power であった。彼らが怖れたのは奴隷所有利益が永続的に合衆国を支配し、そのことによって北部権益、市民的自由、望まじき経済施策、自由白人労働の未来が侵犯されることであった。従って彼らの陣営は奴隷制の道徳性、個々の奴隷の窮状、自由黒人の権利等にはほとんど関心を抱かぬ多くの分子を含んでいたのである。

彼らが反対したのは権力にであった。それは“Slave Oligarchy”, “Slavocracy”等、様々に呼称されたが、最も一般には Slave Power と呼ばれたものへの敵対であった。この奴隷制と Slave Power との区別こそ、共和党の誕生、内戦へと導いた地域間緊張の理解にとって決定的である。それはまた如何にアメリカ人が Slave Oligarchy に指導された叛乱を制することができたか、と同時に1世紀も隔ててなお合衆国の苦悩である人種差別というバイアスを継承しえたかの説明に有力な鍵を提供するであろう。

(註)

- ① 共和党が如何に複雑な構成因子より成るかについての良き要約は次をみよ。
Joel H. Silbey, *The Transformation of American Politics, 1840-1860* (1967), pp. 13-15.
- ② Do., “The Civil War Synthesis in American Political History,” *Civil War History*, X (1964), p. 135.
- ③ Michael F. Holt, *The Political Crisis of the 1850s* (1978), p. 209.
- ④ Eric Foner, *Free Soil, Free Labor, Free Men. The Ideology of the Republican Party before the Civil War* (1970).
- ⑤ *Ibid.*, p. 9.
- ⑥ この関わりにおいて、たとえば奴隷制と奴隷主権力とを峻別することが極めて重大であるとの指摘がなされている。Larry Gara, “Slavery and the Slave Power: A Crucial Distinction,” *Civil War History*, XV (1969), pp. 5-18.
- ⑦ William M. Wiecek, *The Sources of Anti-Slavery Constitutionalism in America, 1760-1848* (1977), p. 15.
- ⑧ *Ibid.*, p. 226.
- ⑨ しかしながらチェイスのような政治的アボリショニストによってこそ、すなわち奴隷制問題を道徳的次元ではなく政治的次元にもちこんだことによって、結局は反奴隷制運動を実効あるものに変えたと高く評価した研究は看過さるべきでない。Foner, *op. cit.*, Chapter 3 “Salmon P. Chase: The Constitution and the Slave Power,” pp. 73-102.
- ⑩ Wiecek, *op. cit.*, p. 275.
- ⑪ *Ibid.*, p. 249. 傍点引用者。

⑫ Gara, "Slavery and Slave Power," pp. 5-6. 傍点原著者。

（二）連邦制度と二大政党制

内戦因に奴隷制をあげる学派は依然として多数の賛同者を見出している。若干のシフトが最近の史家、たとえばE. ジェノヴィーシー、E. フォナーによって企てられた。自由労働社会の北部と奴隷制を基盤にしたプランテーション社会の南部との間の、イデオロギー的、経済的、政治的闘争の实在とその大きさが論じられた。彼らの見解は奴隷制自体のみならず、奴隷制拡大をめぐる^⑩の地域間闘争を根底に据えている。奴隷制廃止ではなく、むしろ奴隷制拡大が係争点をなしたとする点では筆者も賛意を表明しうるし、事実しばしばそう述べてもきた。

ただ彼らの見解には若干の重大な問題について十分に答ええない側面が含まれている。たとえば南北両セクションを分けたものを奴隷制もしくはその拡大問題であったとして、それでは何故に分離の危機に奴隷州が様々な異なった対応を示したかを説明しきれない。また同じ問題が内戦を結果したとして、何故にそれが1820年(ミズーリの危機と妥協)、1832年(ナリフィケーションの危機と妥協)、1846年(ウイルモット法案とユニオンの危機)、1850年(大^{グレート・ディベイク}論争と大妥協)、1854年(カンザス・ネブラスカ法と流血のカンザス)でなく、1861年に生じたかのタイミングについて充足的に答ええない。

従って補強すべき点、或いは内戦因に関する基本的問題は、何が南北を分ったかもさることながら、如何に合衆国が長期に亘ってこの地域間分裂を内包しつつ、しかもそれをコントロールしえてきたのが、どのようにしてこの分裂抑圧力を失って内戦へと至らせたかであろう。

叙上の南部諸州の多様な行動と、内戦のタイミング解明の鍵は1850年代の政治危機、就中、共和党の出現に代表される政界の再編成と、それが完成するに至る間の混乱状態の中に見出されるであろう。この混乱状態とそれを巧みに御しえなかった政治家の大失錯を強調したのは、言うまでもなく修正派の史家たちであった。^⑫確かに政治家個々の決断が状況を決定するという点で修正派に同

意しうるが、ここで強調せんとするのは政治家の資質や決断についての判定ではなく、政治制度の機構、乃至はダイナミックスである。

1850年代の政治危機は二つの相互に関連した次元を有する。その一つは、政党間競争の本質と性格に基本的変化がおこったことである。20年間に亘り合衆国の全土において見事に機能し、地域間闘争を包みこみ封じてきたホイッグ、民主の両党による二大政党政治が崩壊した。かくて1853年～56年にかけて政界の再編成が必然された。第二に、諸新党が組織され、1850年代末の動乱の中から反南部的共和党がこれらの党を糾合して登場した。この政界の再編成がホイッグ、民主両党間の「全国的競合」に代えて、北部的共和党とこれまた圧倒的に南部勢力が支配した民主党との間の「地域間闘争」へと至らしめたのである。

英語圏に特有の、そして合衆国においてことに顕著であったかかる二大政党制の崩壊、それに伴う地域間闘争の激化に勝るとも劣らぬ重要性を帯びた展開^③があった。それは州および地方レベルにおける政治の動向である。人民により直接するこの政治的磁場においても、かつての二大政党間の競合というフレームワークは解消しきった。有権者にとり、従来それを通じて政治活動をなし、政党の選択を行ってきたこのフレームワークが最早や有効でなくなった時、彼らの地方、州レベルにおける諸要求の充足、諸不満の解消は、それゆえ重要性を増した。この政治的真空状態において、彼らがそれぞれに直接する要求に対応しうる新党の誕生を待望したのは当然とも言えるし、1850年代末の政界再編成は、かかる州、地方レベルにおける政治活動を極めて大きなエンジンとしている。特に後述する如く、たとえばオハイオやマサチューセッツにおける第三党の出現と、それがより大規模な政党に及ぼした影響力を考察する時、州政治と全国的政治との重要な相関関係に注目せざるをえない。

この期の研究において従来、正当に評価されてきたとは思えない一つの側面がある。約言すれば、二大政党間の競合という旧来の図式の崩壊は、通常の政党政治の運用では有権者の個人的要求の充足、地域的苦悩の回復は望めないとする一般人心の既成政党への不信感の考察である。旧来の政党機構、運営の非効率への不満と不信が、党の改革さらには新党結成待望の声を大にさせた。

改革と再編成を求める声は、さらに別の源泉からもひきだされた。それは独

立革命以来アメリカ政治を貫流する共和政治への深い愛着と信奉とであった。内戦前期のアメリカ人にとって、共和政治は多くの事柄を意味し、この信条に対し異なったアメリカ人が異なった側面を強調した。しかし1850年代、南北双方ともこの同一の信条の正統派であることを任じあった。すなわち共和政治とは人民主権を核とすること、損なわれつつあると彼らが感じたこの共和政治を回復維持するために、政治的手続の改革の必要性を主張しあったのである。両者の相違は何が反共和主義的陰謀かの定義と、それを打破する方途であった。たとえばノーナッシング(アメリカ)党が、その顕著な反応の一つを代表する。

1787年以降、地域的過激主義と政治構造との間には或る示唆的な関係が存在した。つまり二大政党間の競合が存在しない時点、或いは場において、地域間敵意が露わに且つ強大に認められた。常に二大政党の存在する時、尖鋭なセクショナル・ラインは消滅もしくは地域間敵意は穏健化し、党への忠誠心がそれを中和する働きを示してきた。約言すれば、政党間競合がむきだしの地域間闘争に対する一つの選択肢を構成してきたのである。

このことを少しく歴史的に振り返って確認しよう。1790年代に、フェデラリストとジェファソニアン^①の両党が経済、外交政策をめぐる争うために結成される以前は、国会は地域的ブロックに分裂していた。セクショナル・ラインは1790年代末の両党間闘争の高まりの中で消失した。しかし1800年以後、フェデラリストの党が圧倒的に優勢なジェファソンの政党への反対勢力としては極めて弱体になった時、そのラインは再現する。1819年～21年にかけてミズーリを奴隷州として加入させる問題をめぐり、地域間対立が激化したのも両党間の競争が存在しない時期に一致している。1820年代にヴァン・ビューレン(Martin Van Buren)が、ジャクソニアン民主党結成に力のかしたのは、危険なセクショナルリズムへのより安全な選択肢として二大政党制度を復活させることを特にその動機としていた。

類似の現象は1832年～33年のナリフィケーション危機の時点にも認められる。過激なセクショナルリズム、州権論を打ち出したのはサウスカロライナのみであって、州レベルにおいて二党制度を維持していた他の奴隷諸州はサウスカロライナの呼びかけに応じず、ジャクソンすなわち民主党への信を維持したので

ある。1860年～61年の冬、分離した七つの奴隷州は諸政党、諸政治家に信をおかなかったグループであり、まさに1832年にサウスカロライナを特長づけた政治的プロセスを示した。すなわち南部権益を守るには最早や党の指導者によっては不可能であるとの不信感の下に、最終的で別な解決策を求めたのである。^⑤

共和党は反南部感情の増大を主因に、北部における支配的政党として誕生した。そしてその抬頭がセクション間の関係を悪化させた。その誕生期と抬頭期1854年～60年の極めて急速で複雑な政治的環境の説明は必ずしも容易ではない。しかし内戦へと導いたこの政治的危機を形成した三つの展開が認められよう。ホイッグ党の消失と、それに伴うかつての二大政党競合というフレームワークの霧散、有権者の再編成がそれらである。その結果、合衆国の全地域においてバランスされた政党政治から、北部においては共和党、他方、南部が圧倒的に支配する民主党といった地域的両極化への転換がもたらされた。

ホイッグ党の、ことに州レベルでの消滅がこの期における最重要な有権者再編をもたらした。同党の死は平時における政治の合理性に対する一般大衆の不満と疑惑を育成し、逆に陰謀が共和主義を危うくしているとの懸念を生みだした。

地域間対立が隠れもなく存在したことを認めた上で、何故にそれが1830年代、1840年代にではなく、1850年代にかくも危機的局面に達したのかはさらに問われてよいテーマである。

旧来の二大政党制度、しかも両党がほぼ同一の勢力を有し全国的な支持基盤を持っていたようなそれ、が崩壊したことを因にあげうる。ただ崩壊因の正しき理解のためには、如何にそして何故に該制度が作動してきたかの究明が必要である。両政党間関係、政党および政党制度に基盤をおきながら、しかも責任を地方、州、中央政府に分割していた連邦制度そのものが重要な考察対象として浮上する。

前述した如く、もしアメリカの政党制度の風土が地域間闘争の平和的解決に有用であったとするならば、逆説的ではあるが二大政党制を支えきったものは、問題「解決」ではなく「対立」それ自体であったと言えよう。政党の健在性と政治的プロセスへの大衆の信は、それゆえ政党間相違の認識と、より実体

的には両党の対立にかかっている。政党間の相違がある限り、有権者は党を通じて政府に影響力を行使しようと信じるからである。このことをすでにジェフ・ソンは1798年「すべての自由で討議をむねとする社会においては、人間の本性よりして、対抗政党が存在しなければならない」と述べている。実際、政党は「相手方が明白に定義されない時、危殆に瀕する」と言える。^⑥

1840年代、1850年代の政治家たちは、それぞれ自党の統一と有権者の支持を保持するために政党間対立が必要であると信じていた。該期の重要な諸決定は他党との相違点を明確にするラインと係争点とを追求し、それにより有権者の党忠誠心維持を目的としてなされた。その意味において二大政党制を破壊したものは対立ではなく、むしろコンセンサスであった。たとえば厄介極まる奴隷制問題の国会議場からの排除というコンセンサスが、やがては噴火する基底因となった——と主張するのは強ち逆説的ではない。

合衆国において地域間敵意が存在したにもかかわらず、長期に亘って二大政党制が機能しえた理由の一つは連邦制度にある。従って1840年代、1850年代の研究者は、連邦制度が政党に及ぼしたイムパクトを適切に秤量せねばならない。地方、州、連邦に権力を分け与えたこの制度下において、二大政党制の死を説明するのは、共和党誕生物語の解説に有益である。そこでは全国的政党内における地域的分裂と、それぞれの地域内における諸州政党の死を区別することが必要とされる。連邦制度内における権力の分割に起因する複雑性を認識することによってのみ、内戦へと至った政治変化の真相に近づきうる。

たとえば、奴隷制に絡む諸問題が国会においてセクショナル・ラインに沿って分れた時、州段階ではそれらは政党ラインに沿って論議された。ニューヨーク州ホイッグとジョージア州ホイッグとは奴隷制関連事項につき、まさに対極的な論を展開しえた一方、彼らはそれぞれの州においては共通の敵たるデモクラットを攻撃し自らの勢力を強化するため国会レベルとは異なった論陣を張りえた。このような州レベルにおける政党間選択の可能性を残していたことが、二大政党が、たとえ全国的政党としては内部で意見の分岐をみたとしても、州レベルにおいて他党とは異なった傾向と選択肢を与えることによって、地域間危機を辛うじて抑制しえた理由であった。まさに連邦制度の利点が、重要

なメカニズムの作動を可能にしたのである。

従って合衆国のすべてのレベル（連邦、州、地方）において、政党間相違のイメージが消失した時、同時に党への信が薄れ、それとともに南北双方において国家分断をもたらすような政治的条件が生起した。それゆえ、永続的ではあったが、ともかくコントロールしえてきた地域間対立が何故に1850年代において統御不能になったか、そして旧来の政党がすでに激変をみせつつあるこの状態に対応しえず遂には共和党結成、およびそれに引続く分離と内戦を許したのであるか。それは再言するならば、政党と連邦制度との関係を明らかにすることによってのみ可能な解明であろう。

まさにそのことをカルフーンは、1850年危機の時点、上院での彼の有名な最後の演説の中で述べていた。彼はユニオンを結びあわせている絆——ユニオンが共和主義的自由と平等に対する並びなき保証者であることを前提にして——^⑦について明哲な分析をなした。曰く、これらの絆は数多く且つ多様である。そしてそれらの幾つかはセクションが離反するにつれ、緊張によって切断されてしまった。しかし他の絆は依然、結びつづけている、と。^⑧そしてこの残っている絆の中でホイッグと民主の二大全国政党ほど強い統一作用体と認められているものは他になかった。「この二大組織がアメリカ連邦制度においてユニークな機能を果していた」、と。しかし同時に彼は少しばかり性急な行動をとったことがある。1848年、つまり彼が南部人に対し「南部諸州人民への辞」によって南部ブロック形成を呼びかけた時、受容されるかにみえた最後の局面で南部ホイッグが反転した。そしてツームズは彼の計画を酷評した——それは単なる「南部ホイッグを解体する一つの臆面もない挙動」にすぎない、と。^⑩

カルフーンには奴隷制の下では南部が超党派の行動をとると期待した傾きがかがえる。同時に明晰なカルフーンにして、同じデモクラット、ホイッグが連邦レベル、セクションのレベル、州のレベルにおいて異なった対応を示すことに気付かなかったとは思えない。しかし彼のこの失敗例にてらしても、前述の政党と連邦制度との関係の精査が不可欠であることを知りうるのである。

また反奴隷制派イデオログの運命も同じであった。党への忠誠心がしばしば反奴隷制理念に先行したからである。かくて1848年、両党内の反奴隷制分子

が連合して自由土地党を結成した時、多くの反奴隷制派は旧来の党に留まった。さらに固有名詞をあげれば、デモクラットではベントンが自由土地党に加わらず、ホイッグではリンカーンは言うに及ばずグリーリやウエイドの如き人物でさえもこの新党よりも、ルイジアナの奴隷主テイラー支持を打ち出したのは周知の事実である。ここにも二大政党制と、それが持つ国家分断的諸力への大きな障壁、換言すればユニオン統一の機能を見出すことができよう。この機能の崩壊プロセスを辿ることがすなわち新生共和党成立の歴史そのものを構成する。

（註）

- ① Eugene Genovese, *The Political Economy of Slavery* (1965) ; Foner, *op. cit.*
- ② 言うまでもなくその代表の一人であり、且つ明白にすぎるほどのタイトルを附した論文を発表したのはランドールであった。James G. Randall, "The Blundering Generation," *Mississippi Valley Historical Review*, XXVII (1940), pp. 3-28.
- ③ Richard Hofstadter, "Political Parties," in C. Vann Woodward (ed.), *The Comparative Approach to American History* (1968), pp. 207, 209.
- ④ Holt, *op. cit.*, p. 7.
- ⑤ James Banner, "The Problem of South Carolina," in Stanley Elkins and Eric McKittrick (eds.), *The Hofstadter Aegis: A Memorial* (1974), pp. 60-93.
- ⑥ Michael Wallace, "Changing Concepts of Party in the United States: New York, 1815-1828," *American Historical Review*, LXXIV (1968), p. 476.
- ⑦ Holt, *op. cit.*, p. 8.
- ⑧ この点に関するカルフーンの立場についての有益な論考は次に詳しい。Avery O. Craven, *The Coming of the Civil War* (1942), pp. 252-258 ; do., *The Growth of Southern Nationalism, 1848-1861* (1953), pp. 74-76 ; Charles M. Wiltse, *John C. Calhoun. Sectionalist, 1840-1850* (1968), pp. 458-465 ; Holman Hamilton, *Prologue to Conflict. The Crisis and Compromise of 1850* (1966), pp. 71-74.
- ⑨ David M. Potter, *The Impending Crisis, 1848-1861* (1976), p. 225.
- ⑩ Robert Toombs to John J. Crittenden, January 3, 1849, in Ulrich B. Phillips (ed.), *The Correspondence of Robert Toombs, Alexander H. Stephens, and*

Howell Cobb (1970), p. 139.

（三） 諸政党の消長と変容

複雑で多様な構成要素からなる共和党の物語を、先ずその前身の中で大きな比重を占める自由土地、ホイッグ両党の興亡史をとりあげ、前節で触れたいわば概念図の実体化を試みることで始める。両党の推移の与えたイムパクトは、まさに前節で指摘した諸点を実証的に視認させるからである。勿論、それは民主党変容の物語でもある。^①

自由土地党の結成は周知の如く1848年に始まる。この年、同党は第三党として目ざましい成果をあげた。自由州で投じられた一般投票の14.4%を獲得し、基軸州ニューヨーク、マサチューセッツさらにヴァモントでも民主党の得票を凌駕した。これは反奴隷制派にとって、新党が北部における支配政党になる可能性を期待させるものであった。

しかしこの新党が二大政党に与えたイムパクトは、これら既成政党切り崩しといった内部滲透的なものというより、外圧的であったと表現できる。確かに自由土地党はニューヨークで民主党の分派バーンバナーズの支持を得た。しかし彼らの支持理由は反奴隷制の「大義」に根ざすものというより、「州内政治」でそのライヴァルを打倒することに大きく依っていた。そして翌年この大量の支持者群は旧来の民主党に復帰した。そのためこの第三党は、次の大統領選挙戦を迎える1852年までに崩壊寸前の状態に陥った。同年に新党が得たのは、自由州の投票数の僅かに6.6%であった。^②

しかしこの自由土地党の事実上の解体が二大政党に同じディレンマを提供した。すなわち北部ホイッグと北部デモクラットは、州選挙で勝利するためにはいずれも前自由土地派の票を必要とした。同時に国政レベルの選挙で勝つには、南部同輩の支持を必要とした。これは両立不可能の要件であり、州組織を強めた際には全国的組織が弱化する。またその逆も真という事態を準備したからである。これが前節で指摘した連邦制度内における州レベルと国政レベルでの政治闘争の複雑で微妙な関係の一例証である。

政治家にとり、両者の中ではより直接する地方的勢力の方が全国的勢力よりも、より必須であった。北部デモクラットも北部ホイッグも1848年～52年の間、balance of power を握っているこのフリーソイラーの票に媚びざるをえなかった。オハイオとマサチュセッツにおける1848年選挙後の政治的展開がその適例である。

オハイオではフリーソイラーが州議会で二大政党間の平衡板を握っていた。この複雑な状況下における彼らの戦術は、どちらの党がより反奴隷制的であるかを秤ることに基づいてたてられた。すなわち合衆国上院にどの人物を送るか——民主党のチェイスか、ホイッグ党のギディングス (Joshua R. Giddings) か。デモクラットがこれに応じた結果、民主＝自由土地両党連合が1849年にチェイスを当選させた。このことはオハイオにおいて自由土地党が政党としては「崩壊」していたことを示している。しかし連合を結成することによって、所与の目的たる反奴隷制派を国会に送りだした。まさに「廃滅したフリーソイラーが真の勝者」であった。それゆえにオハイオ州ホイッグと南部ホイッグとの間の、またオハイオ州民主党員と南部民主党員間の関係は、最早や地域間調和を昔日の如くに保持しえなくなった。全国的政党からセクショナル・ラインへの移行がすでに発芽しつつあったのである。マサチュセッツでも同様に、フリーソイラーとの連合によって1851年、サムナーは国会に議席を獲得する機会に恵まれたのである。

二大政党ともに北部ではフリーソイラーの支持を、南部では奴隷制擁護派の支持を、それぞれ得る必要に迫られて組織分裂を経験したため、1852年までに真の両地域に基盤をおく政党時代は過去のものとなった。しかし同時にカルフーンが指摘した如く、ユニオンの絆は単一の打撃では切断されなかった。そして1852年、ピアスを両セクションで勝利させて白聖館に送ることにより、超地域バイセクショナル・プリンシプルの原理は19世紀最後の健全さを示した。^⑤

約言すれば、依然、超地域の原理が生存しう一方、州レベルにおける他党との連合が可能でもあり無視しえない勢力を作出する状況が併存する期を迎えつつあったのである。すなわち二大政党内部において共通の基盤を持つ領域を分け持つと同時に、多くの内紛の可能性も存在せしめ、後者が直ちには新党

の結成にと至らぬまでも連合を模索する方向を指しつつあった。

その連合の有力な一翼が、少なくとも一定期間フリーソイラー^⑥であった。

「まさにそれまで30年間支配的であった二大政党組織が崩壊し、新しい有権者へと結晶していく一つの移行期^⑦」が、自由土地党の興亡とともに訪れていた。

共和党を形成すべきいま一つの党、ホイッグ党の消長がこの「移行期」形成に当って、より大きなモメントをなすのは言うまでもない。前述の如くピアスの当選が超地域的調和の最後を例示した一方、同時に強力な分断的諸力も作動していた。1852年にはホイッグ党は極度に分裂し、その全国的組織はこの年の敗北をなかなか回復しえなかった。民主党はよりよく統一性を保ちえた、もっともそれもやがてカンザス・ネブラスカ法の危機の結果として地域間バランスの崩壊に遭遇するのではあるが。

しかしここでは先ず共和党の誕生に絡んで、何故にホイッグの方がデモクラットよりも、より分断的諸力への抵抗力を弱くしか持たなかったかを述べねばならぬであろう。

奴隷制問題が投げかけた圧力が民主党よりもホイッグ党により強くのしかかったのには多くの理由がある。第一にホイッグ党は最初から凝集性が相対的に稀薄であった。ライヴァルの民主党がジャクソン、ヴァン・ビューレン、ポークの下で到達したような凝集力を決して得なかった。さらに注目すべきは、ホイッグ党の勝利した二つの大統領選挙(1840年、1848年)は、いずれも党綱領を公式に出さずに得られたものである。加えて同党は少数党派として戦略的に弱体である時に、原理と政策についての合意がない時でも党を結合しておく力のある勝利の贈物、すなわちスポイルズの分け前にあずかれないという弱点を有していた。「勝利」即「政権党」となるただ一つの魅力が、イデオロギー的に必ずしも一致しない分子を凝集させる。1852年以後の民主党の統一は、まさにそのような便宜的配慮に出るものであった。南北双方のホイッグは、原理と政策でも異なり、且つ結合剤を持たなかった。かくて二大政党ともセクショナル・ラインに沿って分れた時、民主党はその分裂を補填可能にする「勝利」を得るという戦略的に最高度の利点を有した。逆にホイッグ党は分裂への傾斜を強めた。

叙上の二弱点——歴史的に結びつきの弱いこと、敗者の党としての諸状況——の他に、ホイッグ党は奴隸制問題に対する黨員間における対応の諸相違のゆえに、民主党よりも分裂因子を余分に抱えこんでいた。両党とも北部派には多くの反奴隸制感情があったが、ホイッグの方がより強い反対感情を示したと一般に言える。

⑨
ホイッグには高率のピューリタニズム志向の人々がいた。ベンソンはホイッグ主義とピューリタニズムとヤンキーの数との関係を指摘して、ホイッグには潜在的に反奴隸制派が可成りの率を占めたとしている。勿論、すべてのピューリタンがアポリショニストだとするのは単純化にすぎない。^⑩確かに彼らは道徳の後見人を自任するがゆえに、反奴隸制派になりえたが、同時に財産権の尊厳と品行方正とを強く求め主張した人々でもあった。それゆえ彼らの多くが、合法的な奴隸制の財産権を否定する言動に嫌悪感をも示したからである。

従ってニューイングランド伝統の中の、より保守的構成分子は奴隸制問題の提起、上程に抵抗した。まさに著名なホイッグの反奴隸制派リーダーにして後に共和党でも活躍するウード（Thurlow Weed）によれば、良きホイッグとは奴隸制に関し「特別の原理や論争にかかわり合わないこと」と定義されている節が確かにある。^⑪

そして可成り早い時期から、ウェブスター、エヴァレット（Edward Everett）、チョーツ（Rufus Choate）、ウインスロップ（Robert C. Winthrop）等のリーダーは、南部の奴隸所有ホイッグとの間に親密な関係を維持しようとし、棉花プランターとニューイングランドの棉繊維工場との経済的同盟者として、いわゆる「棉花ホイッグ」を形成する。彼らの存在が考察を複雑にしているが、1852年までに第一義的に奴隸制の道徳問題に反応するグループ「良心的ホイッグ」^{コンシヤンス}が、北部において次第に優位を占めていった。

かくて1852年までに奴隸制をめぐる諸緊張——それは民主党にも等しく圧力をかけていた——が遂に全国的政党としてのホイッグ組織を極度に衰退させ、ほとんど分裂に近い状態にまで追いこんでいた。しかし1853年12月、第33国会が召集された時点では、依然二大政党組織は存在していたのである。^⑫

分裂度のより大きいホイッグ党は、かつての勢力回復策、すなわち敵対政党

との間に明確な政策、態度の差をたてることによって活力の蘇生を計ろうとした。だが皮肉にもこの策は、旧来の政党ラインの完全な崩壊と、新党の結成および有権者の劇的な再編成を招来する可能性を大にした。そこで若干のホイッグ、たとえばマサチューセッツのボールズ (Samuel Bowles) などは、二つの方向に焦点を変えた。

先ず1853年彼らは、州内問題にと関心を移した。民主党新政権がかつての離党者の引戻しに成功し勢力を強めたこの時点では、ホイッグ国会議員が足下を固める意もこめて、この転換をみせたのは当然である。

第二は、民主党の抱える難問に乗じることであった。1852年の大統領選挙、1853年の国会議員選挙に同党が圧勝したことが、却って特別な問題を提供させていた。同党には凝集力の必要性を強要する外圧が存在しなかった。また党員を統一すべき計画も有しなかった。パトロネージの配分も内紛因になるであろう。ホイッグ党はこれらに期待をかけたのである。

就任演説において、大統領ピアスは領土拡大政策を阻げるものは何もないと主張した後、「我が国の保全にとり極めて重大であるため、我が領土外においてさらに若干の獲得を計る」ことが必要だとして、北部メキシコの一部を購入するためガズデンを派遣した。¹³ さらには、最初はさほど積極的ではなかったが、より大きな夢つまりキューバ獲得を構想していたのである。これらは北部において、ホイッグのみならず与党内異分子にも格好の攻撃材料を提供した。

パトロネージの配分は全くの失敗であり「破局的」であった。党内派閥の不満は各地で爆発し、そのため「デモクラットは本能的にホイッグとの政党間抗争を激発させることによってのみ……すなわち政敵と判然たる相違点をたてることによってのみ細分化、さらには完全な解党から避ける道が残されている」と自覚したほどであった。しかしこのような危機にもかかわらず、同党はホイッグ党よりも、よりよく耐えることができたのである。¹⁴

これらは余りにもよく知られている事柄である。しかし従来あまりよく理解されてこなかった点が大きく残っている。それは民主党が耐ええたに対し、ホイッグ党が南北双派に両極分解しつつあった、さらに言えば事実上の分裂を経験するや、党全体が解体の危機に見舞われたのは何故か、という点である。

史家は地域間均衡の喪失が不可避免的に同党の衰退を導いた、としてきた。そしてしばしばそれは片翼を失った鳥が飛べないのは政党も同じだと形容されてきた。ホイッグ党の一翼(南部ホイッグ)の脱落を指して、そう表現されたのである。一見この耳に入り易い説明は、歴史的には正しくないことを自証する。一翼だけの地域的な諸政党が、活発且つ成功裡に生存しつづけることを事実が示している。たとえば、まさにホイッグ党の後継者共和党が地域の政党として誕生し、1世紀もの間南部において見るべき勢力を発展させることなしに繁栄したことを想起すれば十分である。さらに後述する如く、民主党もまた1854年以後は地域間均衡を喪失し、ほとんど完全に南部支配の政党に変質しながら、しかも生存しつづけたからである。

ここに至ってホイッグ党衰退の物語から、民主党へと考察を移すこととする。すなわち同党もホイッグ党と同じく地域間均衡を失っていたにもかかわらず、なお存在しつづけた。いわば片翼だけで飛翔しつづけたその能力は何に発するかは精査に値する。

民主党内の均衡喪失は、カンザス・ネブラスカ法から結果された。同法案が下院に提案された1854年においては、民主党が158議席(91自由州、67奴隷州)を有して圧倒的優位にあった。同党の南北両派のこの議席数は、他のセクションの同意なしには重要法案が通過しないこと、党内での地域間コンセンサスが必要であることを示唆していた。しかしダグラスと南部有力議員「F街の仲間」が同法案の通過を強行しようとした時、北部民主党員は全員でないとしても多くが離党し、党に残った北部派はそれぞれの有権者の支持を失ってこれまた弱体化することになる。加えてこの強行突破ともいえる議会運営について、与党大統領ピアスが何ら見るべきリーダーシップを打ち出さなかったことが一層同党の分裂を激化させた。そして事実上、結果として南部デモクラットは同法案に57対2の大差で支持を与えることにより、44対44と分裂的投票をした北部デモクラットを苦境に追いやったのである。

すでに別の機会で述べた如く、デモクラットは南北を問わず、このダグラス法案の中核である住民主権論に対し可成りのコンセンサスを有していた。むしろテリトリーにおける奴隷制問題の適切な解決策として同原理を擁護し、1850

年大妥協で誓約されたこの原理を1852年同党全国綱領に採択していたほどである。ホイッグはこれと対照的傾向を示していた。従ってこのカンザス・ネブラスカ法案(住民主権論)は、党への忠誠心を秤る尺度として強制された。ダグラスはこの原理が党を割ると予感すると同時に、党統一の唯一の原理だとも信じていた。「明白なる天命」が1840年代に民主党を団結させたように、「我が党の分裂を避ける唯一の道は、この原理を支持することである」、とダグラスは2月に書いている。さらに「この法案の原理は、二大政党にとっての試金石を提供するであろう。選挙はただ一つであり、それは民主党側につくか、〔ホイッグ党の〕シュワードの下に結集するかである」とも指摘して、不安と自信の交錯の中で、なお且つ党の分裂よりも党統一の原理としての作用を期待していたようにみえる。

しかし事實は、上院でのダグラスと「F街の仲間」、下院におけるスティーヴンスの強引な戦術も一因となって、叙上の痛打を北部派に見舞ったのである。さらに長期的にみてより深刻だったのは、次の国会議員選挙で北部デモクラットが惨敗し、以後同党コーカスで南部派に対抗できなくなるという事態を招いたことである。党機関での平等性を失って、彼らは次の80年間、党内野党として少数派たりつづけた。すなわち1854年の選挙において、北部デモクラットは91から一挙に下降して25議席にと減少し、他方南部デモクラットの下院議席数は67から58への微減に留まったからである。

これは1854年以降、南部派が民主党を独裁することを意味した。この時点までは、民主党が南部に牛耳られているとのホイッグの非難は党派的宣伝であったが、今やそれは真実となった。北部デモクラットは、以後ニューディール期まで党内における等位性を持たなかった(ただし内戦期と再建期を除く)。次の1856年、北部デモクラットは25から53へと議席を増し幾らかの回復を示すが、75議員を擁する南部派にはやはり及ばなかった。上院においても南北勢力比は25対12で同様に劣勢であった。1858年、北部デモクラットはまた減少し、34対68で南部派議員の風下に立った。上院の勢力比は北部10、南部27であった。

この傾向は内戦まで持続した。1854年以後、民主党内の地域間均衡は崩壊した。当初から極めてセクショナルであることを意識した共和党とは異なり、

民主党は依然、両セクションにおいてその勢力を維持しようと努めた。しかし同時に、これほど南部に牛耳られた期も他にほとんどみられない。

従ってホイッグもデモクラットも、ともに地域間均衡の喪失に悩んだ。しかし南部におけるホイッグの損失が同党北部派の崩壊にもつながっていった一方、北部におけるデモクラットのロスと同党をますます南部で強化して、事実上南部派の支配が確立した。端的に言って、民主党全体を南部利益のマシーンに変容させ、ひいては心的に地域偏向的南部ホイッグをも吸収していった。

かくてホイッグがその地域間均衡を失って2年たらず後に、「北部諸州におけるホイッグ組織は、事実上消滅」し、二大政党制は北部において最終的に姿を消した。他方、民主党は同様の均衡喪失に耐え抜き長らえて、1世紀以上後もその候補者を依然として大統領職に挑戦させることになる。この相違はどこから発すると考えてよいであろうか。

二大政党制消滅の直接的契機となったカンザス・ネブラスカ法は、「両党間で蹴りあわれるフットボール」であり、双方の党の指導者が樂觀、悲觀の二つの予測をたてながら深刻な計算違いをしたことは確かである。民主党もこの連邦法で深く傷ついたが、ホイッグ党もまたこのライヴァルが失ったものを吸収して復興することができなかった。多くの中西部諸州のホイッグは党を去り、反ネブラスカ法連合を結成した。「人民党」、「独立党」、「共和党」等まことに多様な名称の新連合が誕生した。名称こそ異なれ、これらの新勢力はいずれもカンザス・ネブラスカ法を“Slave Power”の陰謀とし、反南部的傾向を有した。依然全国的政党として1856年の大統領選挙に臨みたいとの淡い希望を抱きつづけたホイッグ党に対し、多くの自由土地黨員その他の反南部勢力が幻滅し、叙上の新党結成に走ったのである。

カンザス・ネブラスカ法は確かに再びユニオンを南北に両極化させた。「しかし若干の北部諸州においては、この地域間敵意を新党結成にと転化させることはしばしば困難であった」、「新党は従来ホイッグ党が弱体であった中西部において急速に拡大していった。しかしホイッグ党の磐であり、自らが反ネブラスカ党として活動したいと努めた東部においては、素早い出現はみられなかった」。何故にであったか。次の質問と併せて、そう問う方がよいであろう。

すなわち民主党が北部でますます弱体化しながら南部でいよいよ強くなり、ホイッグ党が南部でますます弱くなりながら何故北部で一層強くなりえなかったのか、という疑問である。それはアメリカ史におけるこの期の不解明の謎として今日もある。多分それは史家が1850年代の諸事象を解明する唯一の鍵として、余りにも奴隷制問題にのみ専心しすぎたからではなからうか。しかし究明の手掛りが全く無いわけではない。

北部でホイッグ党を崩壊させた力が何であれ、それが「奴隷制の持つ分断的力」だけでないのは確かである。同党を深刻に傷つけた全く別の素因があった。それは移民諸グループの間のアメリカ社会における緊張の高まりであった。これらのグループは圧倒的に北部、そして中西部に移住した。これらのグループは圧倒的にカトリックであった。そしてネイティヴは圧倒的にプロテスタントであった。50年代研究において、「いま一つ重要なことは[移民の大量流入とそれを受けての]ネイティヴィストとホイッグとの関係である。実際この期のホイッグ指導者たちを困惑させた最大問題の一つは、同党の再構成に当って、このネイティヴィストたちに賛成するか反対するかの立場を厭でも考察に入れねばならぬこと²⁴であった」。

かくてホイッグ党の死滅、すなわち旧来の二大政党制の崩壊、政界の再編成、新党誕生の究明は、必然的に移民問題への考察へと至る。

（註）

- ① ここでの両党の紹介は、共和党の本格的な結成モメントとなる1854年前後の諸事件を略史的にとりあげるに限定する。
- ② Potter, *op. cit.*, p. 228.
- ③ Theodore C. Smith, *The Liberty and Free Soil Parties in the Northwest* (1897), pp. 164-175. この苦い教訓をホイッグは次の選挙で活用することにより、今度はホイッグ＝フリーソイル連合が反奴隷制派ホイッグのウェイド (Benjamin F. Wade) を国会に送るのに成功している。
- ④ Potter, *op. cit.*, pp. 229-230.
- ⑤ 民主党ピアスは14自由州、12奴隷州を制し、一方ホイッグ党スコットは僅かに2自由州、2奴隷州を得たにすぎない。しかし一般投票では自由州において

43.6%、奴隷州では44.2%をとっている。フリーソイラーは自由州で僅かに6.1%の得票に留まった。また超地域的原理による勝利は、1912年のW. ウイルソンの当選まで完全には蘇生しなかった。

- ⑥ Silbey, *Transformation*, p. 28.
- ⑦ Theodore C. Smith, *Parties and Slavery: 1850-1859* (1968), p. xi.
- ⑧ Kirk H. Porter and Donald B. Johnson (eds.), *National Party Platforms 1840-1964* (1966), pp. 1, 14-15.
- ⑨ 北部デモクラットに比し、北部ホイッグの方が反奴隷制感情の強かったことは国会における二つの投票に明白に示される。たとえば逃亡奴隷法(1850年)に関し、北部デモクラットは賛成26、反対16、北部ホイッグは賛成3、反対50であった。カンザス・ネブラスカ法(1854年)については、北部デモクラット賛成44、反対44、北部ホイッグ賛成0、反対44であった。Potter, *op. cit.*, p. 236 note 25. 投票分析はいずれも下院におけるものである。なお次も参照されたい。拙稿「逃亡奴隷法と人身自由法——地域間危機の復活」大阪経済法科大学論集第8号(昭和54年10月)。
- ⑩ Lee Benson, *The Concept of Jacksonian Democracy: New York as a Test Case* (1961), pp. 177-179, 198-207.
- ⑪ E. Malcolm Carrol, *Origins of the Whig Party* (1964), pp. 173-176. なおホイッグ党の分裂的傾向と構成分子、ドクトリンについては次をみよ。Charles B. Dew, *Ironmaker to the Confederacy. Joseph R. Anderson and the Tredgar Iron Works* (1966), p. 38; Wilfred E. Binkley, *American Political Parties. Their Natural History* (1966), pp. 163-165, 171-173; S.E. Morris and H.S. Commager, *The Growth of the American Republic* (2 vols., 1937), I, pp. 450-451; Richard N. Current, *John C. Calhoun* (1963), p. 124.
- ⑫ Holt, *op. cit.*, p. 139.
- ⑬ James D. Richardson (ed.), *A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents, 1789-1897* (10 vols., 1907), IV, p. 198.
- ⑭ 人事の配分、選挙過程と決着、そしてそれらが起こした不満などについては次の書が具体的に人名、過程をあげて説明している。Holt, *op. cit.*, pp. 141, 143-144.
- ⑮ Potter, *op. cit.*, p. 238; *Notable Names in American History* (1973), "Legislative Branch," 33rd Congress, pp. 96-98.
- ⑯ 拙稿「カンザス・ネブラスカ法案——若干の背景」史林57巻5号(昭和49年9

月)参照。

⑪ Holt, *op. cit.*, pp. 143-144.

⑫ Porter and Johnson (eds.), *Party Platforms*, pp. 16-18. なお次もみよ。拙稿「1850年妥協の成立と准州設立法——住民主権論の登場」大阪経済法科大学論集第7号(昭和54年3月)。

⑬ Douglas to Lanphier, February 13, 1854, quoted in Holt, *op. cit.*, p. 145.

⑭ Potter, *op. cit.*, pp. 238-239.

⑮ Holt, *op. cit.*, pp. 150-151. 傍点引用者。

⑯ Potter, *op. cit.*, pp. 246-247.

⑰ Holt, *op. cit.*, p. 154.

⑱ J.G. Randall and David Donald, *The Civil War and Reconstruction* (1961), p. 3.

(四) 大量移民の流入とそのイムパクト

合衆国が被抑圧者の避難所とみられ、その溶融^{メルティング・ポット}炉の性能を謳われることは、周知の如く一再でない。しかし反移民運動はアメリカ政治を頑強に貫く主流であった。1790年代、1850年代、1920年代はその顕著な例である。この運動が繰り返されることの中にアメリカが異質^{ヘテロジェラス}的社会であること、民族間の緊張が底流していることが反映されている。

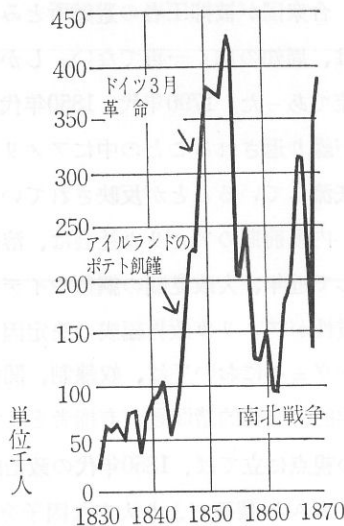
内戦前期のアメリカ社会は、溶融炉説の理想とは遙かにかけ離れていた。そして近年、大政党間の綱領やイデオロギー上の相違よりも、民族的、文化的異質性がアメリカ政界編成の決定因子であるとする史家がふえている。また地方^①レベルにおいては、奴隷制、関税といった全国的問題よりも、このような民族的、文化的諸問題が有権者をより多く動員するとも主張されている。これらの視点に立てば、1850年代の政治的大動乱は奴隷制問題ではなく、ネイティブイズムと禁酒がより大きな因子を代表したと言われる。その意味を解けば、「共和党は反奴隷制のためのと全く同じく、反カトリック、反外人感情のためのヴィークルであった」ことになる。^②

共和党は疑いもなく、北部のアメリカン・プロテスタントの怖れと期待を代

表する側面を有する。禁酒も反奴隷制も基底として道徳的改革を意図しており、且つその達成に州主権の使用を提案していた。それはニューイングランド・プロテスタントの伝統、「他者をして正しく行為するよう仕向ける情熱」に根ざしていたゆえに、彼らにアピールした。1840年代および50年代、合衆国に流入した大量の移民と、それがもたらすイムパクトが彼らを共和党に赴かせた。カトリックによって大半を占められるこれら移民と教会は、プロテスタントが代表するアメリカの連邦制度と自由へのアンティテーゼであり、専制を意味した。他方、移民側は彼らの伝来文化を容易に捨てなかった。それがネイティヴィストの不満の主たるものであり、より過激な反外国人計画には反対である多くの共和党員もこの点には共鳴しえた。ここに両者が結合しうる環の一つがある。

さらにより重要な結合環は、これら大量の外人の政治参加、外人勢力の増大にアメリカ市民が関心を高めた結果生じた政治的ネイティヴィズムがある。反外人感情はホイッグ、後のリパブリカンの間に特に強かった。何故なら移民は概して民主党の都市政治機構に吸収され、圧倒的に民主党候補者に票を投じたからである。移民の大流入を俯瞰的に第一図のように記憶すれば、この増大する政治力がカトリック教会および民主党ボスによって巧みに利用されると確信していたホイッグとリパブリカンの、不安と嫌悪は想像に難くない。移民に不正な帰化証を与える民主党政治家のため、外人はストレートに民主党票につながると信じられた。「投票箱の浄化」がホイッグやノーナッシングの主たる要求であった。^③

移民の政治勢力は都市部に集中していた。それゆえネイティヴィストの反応も該地域で最も活発であった。しかし農村地帯の反奴隷制派も外国人の政治勢力増大に反感を持つ理由を有した。リパブリ



第一図 移民流入傾向

David M. Potter, *Division and the Stresses of Reunion, 1845-1876* (1973), p. 80.

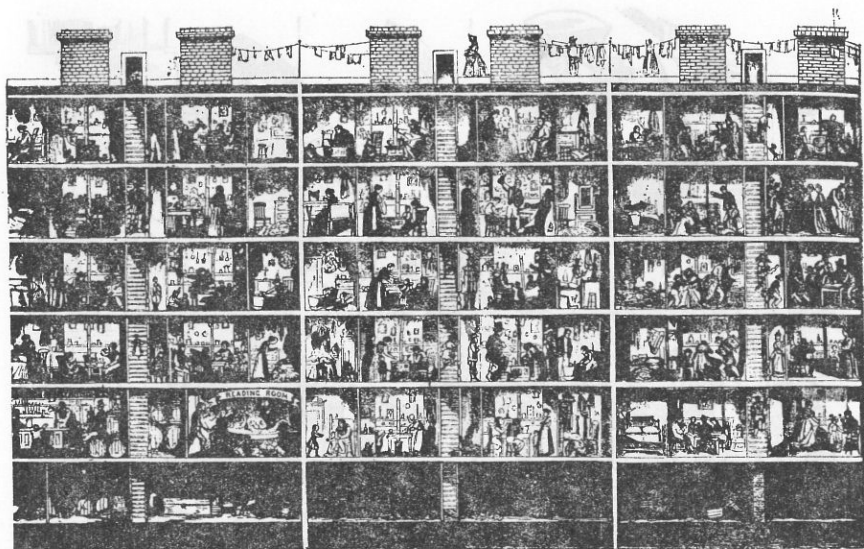


第二図 移民の飲酒癖と社会的諸悪
左：アイルランド系、右：ドイツ系移民
Potter, *Division and Stresses*, p. 107.

カンは後述するように、禁酒法制定に活躍した分子を多く含んでいた。一方、ドイツおよびアイルランド移民は第二図が表現しているように酒好きで知られており、従って通常頑強な禁酒法反対派を構成した。

さらに重視すべきは移民の奴隷制への態度であった。たとえばボストンのアイルランド人の奴隷制擁護的傾向は悪名高いものがあった。このことが反奴隷制派を痛く怒らせた。ボストンでは帰化した有権者の数が、1850年～55年の間におよそ300%の増加を示した。アメリカ生れの有権者の増加は14%にすぎなかった。ほとんどがアイルランド人で占められる帰化人口は、1855年にはボストン有権者の三分の一を構成した。この数字と上述の傾向とは敵意をひきおこすに十分な条件を構成する。それゆえフリーソイラー(後のリパブリカン)は、彼らの選挙での敗北をアイルランド人の票に帰している。

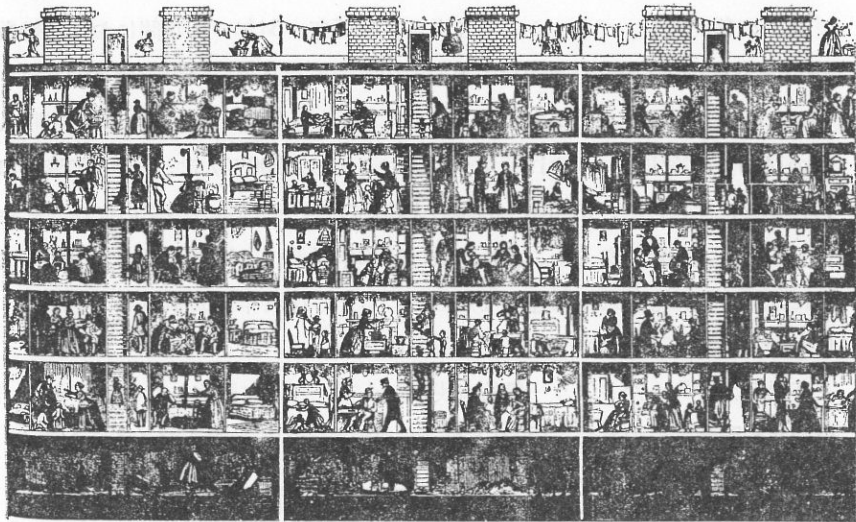
ノーナッシング運動が1854年に始まった時、この運動が「大部分フリーソイラーによって支配されている。何となれば彼らはカトリック教徒の合衆国憲法反



第三図 移民の貧困状態：スラム化したアパート

対運動に激怒していたからである」と観られている。さらに次のボストン市フリーソイラーの言は、反奴隷制勢力とネイティヴィズムの結合可能性を示唆していた。「カトリック系新聞が **Slave Power** を支持している。これら二つの悪はお互いに自然的親和性を持っている」。

外国人が奴隷制南部を避けて北部に集住したのは事実である。移民大洪水の波の直接的被害は従って北部社会にのしかかった。北部人の移民に対する反感はさらに、大都市における社会的諸悪がこれらの新参者によって惹起されたことにより増幅された。1850年代において、移民の大多数がその救済を地方および州当局に依存していた。ニューヨーク市では1860年、浮浪者の80%が外国生れであった。犯罪統計の中で移民が不釣合なほどの高率を占めた。深酒による精神障害者も急増した。東部諸都市がスラムの拡大(第三図)、貧困の増大、犯罪率の増加に苦しんだ。移民への救貧基金はアメリカ人の貧しい部分の唯一の援助源を略取し、犯罪の増加が獄舎設備費を増大させ州財政を圧迫した。要するに彼らの移入は精神的、社会的墮落を招来し、資金を枯渇させて、放置すれば「窮極的には社会制度を弱化させ、合衆国を破壊するに至る」と同時代の北



Potter, *Division and Stresses*, pp. 106-107.

部人を警戒させた。

それはセルフメイド・マン^⑦を信奉し、自由労働を理想視する北部人にとって、国家の社会構造そのものに直接に影響するとの恐怖を生んだ。かくて自由労働をイデオロギーとするリパブリカンとネイティヴィストとの間に、いま一つの連結環があった。

両者の間には収斂する幾つかの領域があった。しかしその結合の態様も複雑であり、さらに両者に共通分野があったとして、たとえば禁酒を支持した北部人がすべてネイティヴィストであったわけではなく、またその逆も真であった。

さらにはネイティヴィズムが政治運動として高まることに反対する理由も存在したことを銘記すれば、両者の結合物語の解説は決して容易でない。ただ一つ、移民の大流入が北部に与えたイムパクトの大きさだけは確実に存在した。従って先ず洪水のマグニチュードを実数によって測り、ついで当時プロテスタントとカトリックの間に存在した率直で隠れもない敵意の度合を探る必要がある。

今日、アイルランド飢饉の時にアメリカに移住した人口が大であったことは

弘く知られている。それに比し余り知られていないのは、これがアメリカ史上「最大の移民洪水」であったことである。1845年～54年の10年間における総数293万9,000人の移民は、第一次大戦前の10年間のその三分の一以下である。しかし総人口もまた小であった。それゆえ1845年～54年の移民は、1845年時人口の14.5%に達する。片や1905年～14年に流入した900万人は、1905年時人口の10.8%にすぎない。1845年～54年の大移民団は、外国生れの率の少ない社会においては、大衝撃であった。移民総数は1842年以前には10万人にも、1847年以前には20万人にもそれぞれ達しなかった。しかし1851年～55年の4年間には、120万人を越えているのである（第一表参照）。

移民が大であったという一般的事実に加えて、さらに際立った特長がある。1845年～54年移民のうち、120万人を下らぬ数が一国すなわちアイルランドから流入したものであった。1851年だけで22万1,000人の移民がアイルランド出身であると記録されている。それはアイルランド移民だけで単年度で人口の1%以上を占めることを意味する。ドイツからの流入についても類似のことが言える。対照的に1905年～14年の大量移民は単年度、一国でこのような割合を占めることは決してなかった。

⑧
そのような大量の外来者、しかもしばしば貧困な外国人の洪水は、社会の状況が最良の時でも緊張をおこしがちである。考察対象時は辛うじて危機が回避された直後であった。イムパクトが最小であることが望まれた期であったと言いかえてよい。

このような危機潜在的時期に大量異分子が流入したのである。新参者のごく少数がアルスター出身のプロテスタントであり、大部分がアイルランド西部および南部諸郡出身のカトリック教徒であったのは真に不運であった。この期、アメリカ人はカトリシズムに大きな敵意を抱いていたからである。そのゆえは、一つには彼らがカトリックと王政とを同一視し、ヨーロッパ世界における共和政の苦難がカトリック＝王政によるものと信じていたこと、第二にはカトリック教会に対する敵意がピューリタンの遺産の中に根強かったことに基づく。

今日、ほとんど忘却され、そして一貫してアメリカ史では極小化されてきてはいるが、19世紀の可成りの期間カトリック教会が放火の対象になったのは一

第一表 出身国別移民流入数(1820年～60年)

Year	Europe											
	Total	Northwestern Europe				Central Europe			Eastern Europe		Southern Europe	
		Great Britain	Ireland	Scandinavia	Other North-western	Germany	Poland	Other Central	U. S. S. R. Baltic States	Other Eastern	Italy	Other Southern
	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	
1860.....	29,737	48,637	840	5,278	54,491	82	65	4	1,019	1,065	
1859.....	26,163	35,216	1,590	3,727	41,784	103	9	10	1,230	1,330	
1858.....	28,466	56,313	2,747	6,879	91,781	124	246	17	1,240	1,461	
1857.....	166,983	54,349	1,330	12,403	71,028	20	25	11	1,007	810	
1856.....	187,729	49,627	1,349	14,571	71,918	462	9	5	1,365	916	
1855.....	187,729	49,627	1,349	14,571	71,918	462	13	9	1,052	1,156	
1854.....	301,576	102,666	4,222	23,070	215,009	208	2	7	1,263	1,008	
1853.....	301,576	102,666	4,222	23,070	215,009	208	3	3	333	1,688	
1852.....	302,484	40,699	4,106	31,278	145,948	110	1	2	447	485	
1851.....	369,510	51,467	2,458	20,365	172,462	20	1	3	
1850.....	308,323	164,004	1,589	11,470	78,896	5	31	15	481	797	
1849.....	286,501	159,398	3,481	7,684	69,235	4	41	3	241	335	
1848.....	218,025	112,934	1,111	2,329	54,281	1	3	243	232	
1847.....	229,117	101,536	1,320	24,306	74,281	8	5	2	164	163	
1846.....	146,315	51,752	2,030	12,303	57,561	4	248	4	151	82	
1845.....	109,301	44,931	689	9,465	34,355	6	1	3	137	320	
1844.....	14,353	13,400	1,336	4,443	20,731	95	13	10	141	232	
1843.....	14,353	13,400	1,336	4,443	20,731	95	6	2	117	186	
1842.....	99,945	51,342	588	5,861	20,370	15	28	2	179	238	
1841.....	76,216	37,772	226	6,077	15,291	10	174	6	179	238	
1840.....	80,126	39,430	207	7,978	29,704	5	7	1	37	151	
1839.....	64,148	23,963	380	7,891	21,028	46	7	1	84	477	
1838.....	34,070	12,645	112	5,769	11,683	41	13	86	231	
1837.....	71,039	13,218	28,508	5,189	23,740	81	19	3	36	269	
1836.....	70,465	30,578	399	5,189	20,707	53	2	3	115	239	
1835.....	41,987	20,927	68	3,369	8,311	54	6	60	219	
1834.....	29,110	24,474	66	4,668	17,686	54	15	1	105	151	
1833.....	34,193	12,436	189	5,355	10,194	31	159	1	1,699	1,155	
1832.....	13,039	2,475	36	2,277	2,413	4	52	3	114	
1831.....	7,217	1,153	19	1,305	1,976	2	1	28	37	
1830.....	12,523	3,179	30	1,065	1,597	3	9	27	
1829.....	24,729	7,415	60	1,432	1,432	1	1	1	23	212	
1828.....	3,753	1,619	26	1,268	511	19	6	35	422	
1827.....	9,753	2,319	26	1,968	511	4	2	57	456	
1826.....	8,543	4,888	18	719	450	10	75	287	
1825.....	4,965	1,264	20	671	220	1	7	45	377	
1824.....	4,016	1,100	7	528	183	3	17	2	33	185	
1823.....	4,418	1,221	28	522	368	1	10	4	63	209	
1822.....	5,936	3,210	24	521	7	63	209	
1821.....	7,691	2,410	23	452	968	5	14	1	30	174	

Compiled from the *Historical Statistics of the United States: Colonial Times to 1957* (1961), p. 57.

再でない。その信仰は非難され、そのリーダーは攻撃をうけ、その財産は脅かされた。彼らがアメリカの共和的慣行について全くの無知であることも敵意を煽りたてる素因であった。同時代人の一人は、その著「共和制の大目標」において、これら移民を「深刻な公害」と呼んで敵意と恐怖を明らかにしている。^⑨

移民、ことにアイルランド移民がアメリカ政治に参加し始めたのは、このような深刻な状況の最中においてであった。彼らの政治参加の第一段階は、民主党とホイッグ党のいずれを選択するかであった。そして両党の伝統の差が、アイルランド人をして不可避的に民主党へと傾斜させた。

民主党と「社会覆没的な」外国人グループとの結託は、この期にはじめて見られるといった目新しい事象ではない。周知の如く1790年代末の外人^{エイリアン・アンド・セディジョン・アクト}および治安法は、ジェファソンの政党と、その外国人支援者たちの勢力増大に反応して制定されたものであった。他方、フェデラリスト、その後身のホイッグは18世紀ニューイングランドの保守的ピューリタニズムを反映する政治的伝統を強く有していた。1830年代中葉のニューヨーク市において、ホイッグの地方支部は率直にネイティヴィズムを許容する計画の推進者であったし、1840年にはホイッグ党支配のニューヨーク州議会が帰化市民の政治的権利を厳しく制限する外人登録法を通過させた。ホイッグ＝ネイティヴィスト共通の組織がしばしば登場した。かかる歴史的背景の下では、移民票が民主党に流入するのはむしろ当然であった。^⑩

ホイッグとネイティヴィズムとの関係が移民に視認されるほどに鮮明であったことを、ベンソンのニューヨーク研究は次のように示してみせている。ニューイングランド人は55対45、イングランドからの移民は75対25の割合でホイッグ党に投票する傾向を示す一方、スコットランド、アルスター、ウェールズ出身の移民票は、90対10で反ホイッグ的であり、ドイツ系移民は通常80対20で民主党傾斜であった、と。^⑪

アイルランド人とピューリタンは互いに異質性を感じあった。かくて再びベンソンによれば、1844年までにニューヨークのカトリック系アイルランド人は95対5の割合で親民主党であった。ひとたびこのパターンが定着すると、新参のアイルランド人は先着の移民に導かれて、民主党はアイルランド人の党だと

信じるに至る。そのプロセスは年毎に自己強化され、民主党を補充し強化する。ホイッグが1844年大統領選挙に敗れた時、その党名をアメリカ党と改称し、アピールの焦点をむきだしのネイティヴィズムに移動させることを提唱したり、帰化には21年間の居住を要すると主張し始めたのはそのような状況を背景にしていた。^⑬

勿論、若干のホイッグ党指導者は、民主党と競争してアイルランド人の支持をとりつける必要性を痛感していた。たとえばホイッグ党ニューヨーク州知事シュワードが、カトリック系諸学校への特別予算を要請したのは有名な事実である。しかしそのゆえに彼がヤンキーから不評を買ったのも同様に有名である。従って多くの例をあげるまでもなく、アイルランド人をひきつける諸施策を唱えたホイッグは少数であったこと、具体的な策よりも甘言を提供する場合が多かったこと、は事実であったと確認しても誤りがない。^⑭

移民票の重さがホイッグにどのような苦難を与え、それが同党のとるべき進路、すなわち政界の再編成にどれほどのイムパクトを与えたか——そのことを先ず1852年大統領選挙でうかがう。ホイッグ党候補スコットは、アイルランド票に媚態を示した。彼は聴衆の中にアイルランド人の支持者を予め配置しておいて、演説にあいの手を入れさせた。しかし選挙結果にみる限り、この戦術は成功しなかったと言える。実際、1844年および1852年のホイッグ党敗北の決定的因子は外国人票だったと彼らが確信していたふしがある。^⑮

ことに1852年選挙は次の事情で最も注目されてよい。同年北部ホイッグが担わねばならぬ重荷は、彼らが同党南部派を失ったことではなく、4年間で「スコットの総得票を上まわる数」にのぼった移民の大群であった。反ホイッグのこの大量票の潜在力が、やがて同党を圧倒するであろうことは明白であった。この大量票がホイッグ党組織の未来に影響を与えずにはおかない。然らばそれは如何なる方向にと強いるであろうか、またホイッグ側からすればどのような対応をとればよいのであろうか。

二つの方向が考えられた。一つは反奴隷制ホイッグが同党を反奴隷制政党に仕立て、同党員のみならず北部民主党内の反奴隷制分子やフリーソイラーを吸収して強くなるか、第二の道としてネイティヴィスト＝ホイッグが同党をアメ

リカ党に仕立てることによって、「未だ移民勢力の危険を認識していない」アメリカ生れの民主党員をひきつけて強くなるかであった。

しかしどの方向も党内および党外において、その目的を叶えられ難い条件を有していた。反奴隷制派は党内では強力な「棉花ホイッグ」との提携の虜になっていたし、党外における自然の同志フリーソイラーや反奴隷制デモクラットと隔絶していた。ネイティヴィストは、シュワードのようなネイティヴィズムを強く非難する人物、或いはそれを問題にするのを避けたいとする人物を多く含む党と結合しようとしていた。かくてネイティヴィストは反カトリック、反移民感情を持つデモクラット吸収に失敗していた。約言すれば、多くの反奴隷制派はネイティヴィスト問題の回避を望み、多くのネイティヴィストは奴隷制問題を排しユニオンの強調に集中することを欲したのである。ホイッグ党はこの奇妙な同食者、多様さ、敗北のレコードなどを抱えて、これらの刺激をすべて政治的前進に代えることなく、逆に挫折していったのである。

今日、多くの史家は叙上の複雑な政治的分解と統合のプロセスにおける中心勢力として共和党の出現を観じる傾向を有する。しかし共和党誕生の1854年においては、諸選挙の結果は幾らか不分明な側面を有するものの、明白に反奴隷制よりもネイティヴィズムの勝利の可能性を示している。この時点では「カトリック或いは移民問題が、アメリカの政治生活における焦点の問題として奴隷制にとって代る」様相を示しているように見える。従って先ずノーナッシング^⑮党の性向と、ついで同党と共和党とのリンクの政治的、文化的条件を探らねばならない。

明確な反奴隷制政党への始動はすでに1840年の自由党にそれがみられ、1848年の自由土地運動で大きなうねりにまで達していた。一方、ネイティヴィストの諸党派も「地方レヴェル」で、1830年代には出現し始めていた。しかしそのいずれも全国的組織に発展しなかった。

同時にアメリカ聖書協会とかアメリカ詠誦協会などの非政治的組織が、その目的と活動において反カトリック的であることを示し始めるとともに、ネイティヴィストの傾向を持った。特に注目すべきは1849年、ニューヨークに設立された秘密結社「米^{オーダー・オブ・スター・スパンダルド・ソサイエティ}国国旗団」である。これが政治力として注目

すべき勢力に成長したのはピアス当選後のことであり、バーカー（James Barker）の指導下に1853年～54年に目ざましい上昇をとげ、1854年6月までに全国的な性格とノーナッシングのラベルを帯びることになった。その秘密性、メンバーの流動性よりして正確な勢力は確定できないが、同時代人の推算では80万人から150万人の間とされている。

⑯
その政治勢力としての抬頭ぶりは、ダグラスにより次のように表現されている。カンザス・ネブラスカ論争期間中に、彼は反奴隷制派の大攻勢の矢面に立たされたが、それにもかかわらず彼は民主党にとっての主たる危険は、反奴隷制派よりもノーナッシングだと指摘し、反ネブラスカ運動は「アボリショニスト、メイン禁酒法者、北部ホイッグの離党者、それにカトリックに対するプロテスタント感情や外国人に対するネイティヴィストの感情を注入する坩堝」になっていると、彼らを攻撃している。

⑰
1855年までにノーナッシングは驚くべき成功を記録した。ニューイングランドではヴァーモントとメインを除くすべてを制し、ことにマサチューセッツでは全投票の67%、ペンシルヴァニアでは40%以上、ホイッグの砦ニューヨークでも25%の得票を示した。中部大西洋岸諸州およびカリフォルニアでも、主たる反民主党勢力はリパブリカンでなくノーナッシングであった。中西部では確かにリパブリカンが組織を完成していたが、ノーナッシングの勢力は軽視できなかった。

同様に重視すべきは、彼らが奴隷諸州にも組織を拡大していったことである。テキサス、ケンタッキー、メリランドを制し、そのため以前は民主党の地盤であった地域がノーナッシングに、ホイッグ党の牙城であった地区が民主党に変身するといった劇的な政界地図の変化がおきた。ヴァージニア、テネシー、ジョージア、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナといった民主党の強い諸州でも彼らの健闘は目立った。それゆえ多くの人が、1856年大統領選挙ではリパブリカンでなくノーナッシングが二大政党の一つとして大統領候補を立てるであろうと予測した。

⑱
ノーナッシングのこの成果に関し、強調さるべきは次の二点である。第一は北部の多くの地域において、カンザス・ネブラスカ法への敵意は確かに激しか

ったが、それよりもカトリック教徒、外人への懸念がより大であったことである。1854年或るニューヨーク人は、「多数の人がアメリカ奴隷制よりも、ローマン・カトリシズムを怖れていることをこの選挙は示してみせた」と書いている。第二は、北部各州のホイッグ党が反ネブラスカ政党として選挙を戦ったのは事実として、彼らが戦術としてとりあげたこの奴隷制問題の失敗ではなくノーナッシングの抬頭が各州ホイッグ組織を破壊したという事実である。或るフィラデルフィアのノーナッシングは、「かつての北部ホイッグ党は存在することを止めた——それは併呑され偉大な“アメリカ党”の中に吸収されていった」と述べている。

⑩
ノーナッシングが既成政党の最終的崩壊、有権者の再編成、政党の再組織に貢献したのは歴然たるゆえに、1854年およびその周辺時におけるその目ざましい抬頭と、それに同じような速度で唐突な終末を告げたこと——そしてそれにより1856年末までに共和党が主たる反民主党勢力として登場することを許した事情を説明する必要がある。

ここでは従来、可成りの程度に理解されてきた反カトリシズム、移民のもたらす諸悪、それらが自由と共和政（ユニオンはそれらを保証する磁場）に与える脅威等が、その抬頭に資したことを述べる代りに、幾分か軽視されきった抬頭因を紹介する。

先に少しく述べたように、明らかにノーナッシングの抬頭は増大する移民への怖れに負っている。不釣り合ほど多くの外人で病院、救貧院、牢獄がほとんど占有されているといつてよい状態は、ヨーロッパがその浮浪者と犯罪人をアメリカにダムピングしている——これがネイティヴィストが繰り返した非難であった。そしてこれら移民のもたらした社会的諸悪、政治的、文化的変化に既成政党は満足すべき対応を示さなかった。

例の如く政権を握っている民主党は、この社会的脅威を無視した。禁酒法に対しては、この種の法律は個人の自由を剝奪するとして反対したし、移民制限計画にも賛意を示さなかった。そしてホイッグ党は諸悪を除去するには余りにも弱体であった。ここに既成二大政党への不信が露わになった。ネイティヴィストの指導者たちは、アメリカ党或いはノーナッシング党を結成することによ

って独自の解決策を求めたし、事実それを実行したのである。

さらにアメリカ労働者と移民の増大による廉価な労働力との競合が、経済的激動と相俟ってアメリカ党の結成を促進した。従来、必ずしも大きくはとりあげられてこなかったこの側面は、次のように素描されるであろう。1849年以降、アメリカ経済はカリフォルニアのゴールド・ラッシュ、鉄道への外国資本投下によってブーム状態にあった。しかし1854年後半および1855年の前半4か月は、厳しい景気後退を経験するが、それはまさにノーナッシング党員が飛躍的に増加した時期と符合している。

新通貨発行によるインフレーションと失業とがおこった。この複合的問題が1854年夏、オハイオ河およびその支流における通商に一大停滞をもたらした。ピッツバーグ、シンシナティ、ルイズヴィル、セントルイスとの通商に従事する労働者は、職を失うか低賃金を強要されるかした。ノーナッシングはこれら諸都市の河岸に面する地区で強力となり、彼らが高物価に直面する一方で失職や低賃金に悩む原因を、その経済的敵者である移民に求め怒りを向けたのは、けだし当然であった。

さらに1849年～54年にかけての急速な鉄道建設、ことに大西洋岸と中西部を結ぶ四幹線の完成が商業、製造業、さらには「アメリカ人民の社会的状況」のパターンを激変させた。比較的に孤立的で同質的であった諸コミュニティは、今や各町村を結ぶ鉄道によって異なった背景を持つ人々と接触し、各地から集まる大量の鉄道労働者の波に洗われた。鉄道が水路による通商を浸蝕し始め、商業的製造業的關係に影響を与え始めるにつれ、多くの労働者たちはさらに高物価と失業とに見舞われた。天候に支配される水路に代り、いわば全天候型の運輸手段である鉄道は、それらを季節に関係なく強要した。

中西部の商工業者は、先進地域である東部との競争に直面して、賃金カットか一時帰休に対応せねば存続が危ぶまれた一方、東部はますますその工場の機械化に努めた。これは中西部のみならず、東部における熟練工でさえも機械化の前に単なる賃金労働者に墮するか失職するかを迫られたことを意味する。要するに1849年～54年の鉄道建設は、多くのコミュニティの経済に劇的な構造変化を迫ったのである。

新しい経済条件への調節と対応は、しばしば民族問題や階層間の敵意を惹起する。そしてアメリカ生れのプロテスタントの経済的、社会的苦難の因が移民に求められたのは十分ありうることであった。それがノーナッシングの構成員に十分に示されている。「ノーナッシング党員について我々が入手している量的、質的証拠は、ノーナッシング主義が圧倒的に貧困および中産階級の運動であったことを示している」。最近の研究はさらに、経済的変化と民族問題との関係を精査してそのことを実証した。²³

この論理は西方テリトリーの処理にも適用しうるであろう。北部の大衆にとって、1854年の主要脅威とは、黒人奴隷の存在が彼らをカンザスやネブラスカからしめ出す因子であると考えたよりも、東部におけるカトリック系移民の存在が彼らをして該地に赴かざるをえないよう仕向ける、とするものであった。外人グループの脅威を感じたファーマー、小タウンの住民は等しくこれらの外人圧を非難し、かかる社会の不安定と無秩序が移民の所為だとした。

加えてハイアラキーを成すカトリック教会、その頂点に立つ法皇はアメリカの共和政治にとり危険であると信じられた。ことに法皇がベディニ（Gaetano Bedini）なる教皇使節を派米して、教会の経済力を高めようとした時、まさに法皇のアメリカ支配が始まったと受けとられたのである。

“Slave Power”の代りに「カトリック教会」がアメリカ共和国の主たる覆没勢力と見做された。教会は「専制的信仰」の中心であり、その階級的組織は「アメリカ共和主義の本質と対極」にあると攻撃された。ノーナッシングが移民の帰化期間延長を求めたのも、「共和制政府の三つの基底的原理——精神的自由、自由な聖書、自由な学校を保証するためであり、そのことによってアメリカをアメリカナイズする偉業を促進する」ためであった。²⁴

最も重要なポイントは、ノーナッシングが移民およびカトリック教会の脅威を、腐敗し無責任で専制的な政治家たち、すなわち既成政党と結びつけ、それら諸政党が効率のよい政治プロセスを通じて共和制の確保に失敗している、と不信を表明したことである。

リパブリカンは、中央政府が北部多数派の意見に背を向ける無責任さを「Slave Powerの陰謀」に帰したが、ノーナッシングの論理と指弾に従えば

それは各地方、各州における諸政府の無能と不正に起因し、そのいずれもが移民〔票〕への媚態にあった。

ノーナッシングが表明したこれらすべての不満と悩みは、デトロイトの一判事から合衆国最高裁判事J. マクリーンに宛てた手紙(1855年)に間然するところがない。曰く、「四分の一世紀の間、政治商人や政治賭博師が世論を操り、党組織をあのような方向に向けてきたこと、そのため人民の真の感情とは逆に我がユニオンが危殆に瀕し、悪人が権力を握って地位についてきたのは御承知の通りです。そして我々が希望を持てそうにありません。両党とも、いわゆる外人票に求愛し……成功を確かなものにするために外人“王子”に臣下の忠誠を一層誓おうと努めています」。かくて彼はホイッグ、民主の両党を非難した後、善良なる人々が「秘密のアメリカ運動」が興起してこれに対抗せんとしていることに喜びを表明している、と記している。

⑤
このような新党ノーナッシングの目ざましい抬頭に対し、既成政党ことにホイッグ党の凋落は何処に因があったのか。ノーナッシングに対する強い敵意を抱いていたコネチカットのウエルズ (Gideon Welles) が見事にそれを分析している。「〔民主党〕政権が失ったものをホイッグがかちうるであろうと思ったのは、シュワードおよび〔ニューヨーク州における〕彼の友人たち、さらにはマサチューセッツその他各州におけるホイッグ指導者の誤算であった。既成二大政党組織およびそのマシーンの不義を除去したいという一般感情が存在したというのが真理である」、と。

それに反し、1854年にノーナッシングが大成功を収めたのは、マサチューセッツの共和党員サムナーによれば次の如き理由に基づく。「〔ノーナッシング成功の〕説明は簡単に言って、こうである。すなわち人民は既成政党に倦んでいた。そして彼らは新しいチャネルを作りあげたのだ」。ノーナッシングは古い政党が最早や真の民意を汲みあげえないとする真空地帯に巨大な姿を見せたのである。

⑥
南部においてさえも、ノーナッシング主義はホイッグ党が崩壊した後、反民主党組織として前ホイッグ黨員糾合の旗印となった。ここでも既成政党への不信という同様の政治環境がそれを生みだした。

南部と北部を問わず、ノーナッシング主義は改革のヴィークルを代表した。それは簡明に既成二大政党の破壊、腐敗政治家の追放、政治権力の人民への回復を求めた。彼らは候補者を多数決による一種の直接予備選挙制で選び指名することにより、旧政党不信因の一つであったマシーンの破壊を目指していた。それは「底辺からの影響力」、「草の根運動」を代表した。彼らがしばしば自らの党を「人民党」と称したのは、そのような理由からであった。そして彼らは地域に深く根をおろしていたのである。

事実、ノーナッシング党は初期の選挙戦においては、各地で新人を選出し旧来の政治指導者たちよりはより若く、より貧しい人物を選出している。たとえばピッツバーグの例では、ノーナッシング指導者の半数以上は35歳未満であり、その60%が資産5,000ドル以下の階層出身であって、当時のホイッグ党や共和党の指導者のそれを下まわる。マサチューセッツ州議会に議席を占めたノーナッシングは圧倒的に職人出身であり、この事情は北部各州において類似的であった。

ノーナッシング党は、移民が合衆国の最も古い社会的傷口をこじあげ、経済的問題を惹起し、さらには文化的諸問題を提供したことを契機に、既成政党への一般的不信感のうねりに乗じて目ざましい成功を収めた。問題はこのネイティヴィズムと反奴隷制主義とが如何なる関係にあり、相互にどのように影響しあいながら連合を形成しえたかである。両主義間の親和力と違和感とは、どのようなであったか。単一の反奴隷制主義、或いは反南部主義でなく、多様な主義、運動は如何にして一つのフロントに結集されたのであろうか。

（註）

- ① Holt, *op. cit.*, p.11; Benson, *op. cit.*, pp. 165ff.; Walter Dean Burnham, "Party Systems and the Political Process," in William N. Chambers and Walter Dean Burnham (eds.), *The American Party Systems* (1967), p. 285.
- ② Foner, *op. cit.*, p. 227; Benson, *op. cit.*, pp. 180, 199-200, 206.
- ③ Foner, *op. cit.*, p. 230.
- ④ *Ibid.*, pp. 226-227, 230.

- ⑤ Silbey, *Transformation*, p. 9.
- ⑥ Boston *Commonwealth*, June 24, 1854, quoted in Foner, *op. cit.*, p. 231. 傍点引用者。アイルランド人が奴隷制に好意的であった理由として、彼らが改革主義に敵対的な文化を母国で身につけ、階級区別を深く尊重する傾向があったことなどがあげられている。
- ⑦ Samuel C. Busey, *Immigration: Its Evils and Consequences* (1856), reprinted in Silbey, *Transformation*, pp. 47-52 as “Source 4”; Foner, *op. cit.*, pp. 231-232.
- ⑧ 第一表参照。See also Potter, *Impending Crisis*, p. 242; Silbey, *Transformation*, p. 9.
- ⑨ John P. Sanderson, *Republican Landmarks: The Views and Opinions of American Statesman on Foreign Immigration* (1856), reprinted in Silbey, *Transformation*, pp. 43-47 as “Source 3”; Potter, *Impending Crisis*, pp. 242-243.
- ⑩ *Ibid.*, p. 244; Silbey, *Transformation*, pp. 11-12.
- ⑪ Benson, *op. cit.*, pp. 278-287.
- ⑫ Silbey, *Transformation*, pp. 11-12; Potter, *Impending Crisis*, p. 245.
- ⑬ 彼はノーナッシング主義に強く反対した。多分それが後日、彼の大統領候補指名を失わせる一因となった。1854年7月12日の彼の演説を参照されたい。*Congressional Globe*, 33 Cong., 1 Sess., pp. 1708-1709.
- ⑭ Binkley, *op. cit.*, pp. 162-163, 187-190.
- ⑮ *Ibid.*, p. 195; Potter, *Impending Crisis*, pp. 249-250.
- ⑯ Holt, *op. cit.*, pp. 156-157.
- ⑰ *Cong. Globe*, 33 Cong., 2 Sess., App., pp. 216-230; Potter, *Impending Crisis*, p. 250.
- ⑱ Allan Nevins, *Ordeal of the Union* (2 vols., 1947), II, pp. 326-328, 341-346; Holt, *op. cit.*, p. 158; Potter, *Impending Crisis*, p. 250.
- ⑲ Holt, *op. cit.*, p. 159.
- ⑳ Silbey, *Transformation*, pp. 8-13. なおノーナッシングの動向について全国的レベルでの考察よりも、州および地方レベルのそれに主たる焦点をあてながら、なお且つ同党の成立事情等を明らかにしている秀作として次のものがある。笹井悠子「大量移民の流入とノーナッシング党」史林第60巻第3号(1977

年5月)。

- ②① Silbey, *Transformation*, pp. 12-13.
- ②② Michael Holt, "The Politics of Impatience: The Origins of Know Nothingism," *Journal of American History*, LX (1973), pp. 309-331.
- ②③ Do., *Political Crisis*, p. 161.
- ②④ Herbert Gutman, "Work, Culture, and Society in Industrializing America, 1815-1919," *American Historical Review*, LXXVIII (1973), pp. 531-588.
- ②⑤ Holt, *Political Crisis*, pp. 162-163. 傍点原著者。
- ②⑥ 「現下の最も警戒すべき罪の一つ」。William G. Brownlow, *Americanism Contrasted with Foreignism, Romanism and Bogus Democracy* (1856), reprinted in Silbey, *Transformation*, pp. 53-57 as "Source 5."
- ②⑦ Holt, *Political Crisis*, p. 165; Silbey, *Transformation*, p. 13.
- ②⑧ Holt, *Political Crisis*, p. 166.

(五) 北部連合の成立と1856年大統領選挙

1856年、デトロイト・フリープレス紙の主筆は次のような社説を掲げた。
「今やこの州には、民主党に対抗する三つの派が結合している。すなわちメイン禁酒法派と、宗教テスト派またの名ノーナッシング派と、反奴隷制派とである」^①。これは反民主党勢力が多様な要素から成ることを示唆した行文であるが、同時に各成分がそれぞれ異なった問題を主張していたことも示している。それゆえ当時の反民主党指導者や今日の史家が考慮すべきは、この様々な問題にどのような優先順位を附するかであろうし、就中、緊要事は反奴隷制派(共和党)指導者の、ノーナッシング主義者への態度であろう。然してその考察に先立ち、ごく概括的な政治地図を次のように理解しておく必要がある。

前述の如く民主党はすでにほとんど完全に南部派の支配下に入っていたこと、一方、北部においては1855年末までに共和党がペンシルヴェニア以西で反民主党の主要政党として出現していたこと、ノーナッシング党はオハイオ以東のほとんどの州で同様の役割を演じていた、というひとまずの俯瞰図である。

加えるべきは、1854年諸選挙の結果は、反奴隷制主義よりもノーナッシング^②

主義の勝利の可能性が大であったこと、換言すれば共和党結党時点では、カトリックまた移民問題がアメリカ政治における焦点的問題として、奴隷制問題にとって代る様子があるようにみえた“climate”を想起することであろう。

かかる背景で、ノーナッシング主義への共和党の態度を探ることは必ずしも容易な作業ではない。事実、史家は両者の間の関係を認識するに当り、今日でも多くの難渋を覚え、その理解も素早いとは言えない。

それは多分、一つにはアメリカ史上最もユニークなと言ってよいほどの複雑な状況が作出されており、共和、ノーナッシングの二党とも自党こそが選挙に勝利するだろうと主張しえたほど混みいった条件下におかれていたことによる。そして第二には、史家にとって彼らがしばしば理想化する傾向にある反奴隷制主義と、同時に彼らがしばしば聳聳を覚えるネイティヴィズムとを、協働させ共同関係にもちこむ作業に心理的困難を覚えたから、と言えよう。

しかし現実には、反奴隷制派とネイティヴィストは互いに闘争を避けた。その理由は彼らが同じ有権者にアピールしていたからである。勿論、後述するように両グループの間に相違は歴然として存在し、それはリンカーンによって確認される。しかし両者間に親和性も存在した。この融和の説明に先立って、共和党の「起源」を一瞥しておこう。

共和党の誕生契機は、奴隷制擁護策たるカンザス・ネブラスカ法(1854年)であったとするのは、疑いもなくほとんどすべての史家の一致するところである。それは次のようにネイティヴィストの抬頭と重ねあわせて考えられる。

すなわち北部において、民主党への主要敵対勢力としてネイティヴィズムとリパブリカニズムのいずれが抬頭するかであった。この両者間の主導権争いは複雑ではあるが、その物語はカンザス・ネブラスカ法実現から次の大統領選挙(1856年)の間に生起したアメリカ二大政党制の崩壊をもって始まる。潜在的爆発力を有する奴隷制問題が、1854年に政治舞台に再登場してきた時、伝統的な党組織は全く崩れ、新党結成への動きが活発となっていわゆる「政治革命」がおこった。

この革命をもたらしたのは単一の問題ではなく、諸問題の結合であり、それゆえそれだけ多くの新党を生んだ。コネチカット州の状況が最も典型である。

ボールドウィン (Roger Baldwin) によれば、同州の1854年選挙は「カンザス・ネブラスカ問題への憤激、メイン禁酒法に絡んだ興奮の中から成育してきた政治革命」を代表する、と表現された。^④

ともかくカンザス・ネブラスカ法は民主党にも大打撃を与えた。反ネブラスカ法民主党員が相ついで離党するのをみて、反奴隷制派ホイッグとネイティヴィスト・ホイッグ双方が素早く反応して新党結成に動いた。この広汎な政治的变化の中で、反奴隷制派の活力がネイティヴィストのそれより相対的に顕著であった。なぜならネブラスカ法への反応は、第一義的に反奴隷制反応だったからである。以前はホイッグが弱体であった中西部諸州において、可成り容易に且つ急速に反奴隷制を基底にした十全に統合された新党が生れた。

しかしそのテンポは他の北部諸州では同じでなかった。たとえばニューヨーク、ペンシルヴァニア、ニュージャージーなど、むしろホイッグ党の強かった諸州では反奴隷制派はゆるい一時的連合で満足しなけりばならなかったからである。

このように各州によって、反奴隷制ホイッグが新しい反奴隷制組織結成に進むプロセスが広汎に異なったため、党のパターンも多様で、名称も様々であった。「リパブリカン」なる語は、1854年2月ウィスコンシン州リボンで提案された。そして5月にワシントンでの30名の国会議員より成る集会で是認された後、7月6日ミシガン州ジャクソンにおける州大会で採択された。しかしオハイオ、アイオワでは反奴隷制派は人民党の名称を使用したし、若干の州では連合党、反ネブラスカ党を名乗った。名称はどうであれ、北部各州で新しい反奴隷制コンビネーションが結成され発芽したのは事実である。^⑤

新しい反奴隷制政党の設立者たちは、その活動のクライマックスを7月13日すなわち奴隷制を禁じた北西部領地条例制定記念日に設定した。この日、彼らはヴァermont、オハイオ、インディアナで同時に大会を開いた。それはミシガン州大会で共和党の名称が採択された僅かに1週間後のことであつた。^⑥

しかし反奴隷制派ホイッグのみが新党結成に奔走したのではない。ネイティヴィストも新党設立に動いていた。前述の3州同時の反奴隷制派集会の4日後、「米国旗団」は13州からの代表団をニューヨークに集めて、全国的組織のた

めの大会を開いた。

1850年代の政治的動乱は以上の二者に留まらない。すでに1851年メイン州でアルコール販売禁止法を採択させた強力な禁酒運動があった。この勢力は1854年までに他州においても組織を有し、諸選挙には独自の候補者をたてるまでになっていた。それゆえ1854年の投票者たちは、全く多種多様な政党名に直面したのである。すなわち旧来の民主党、ホイッグ党、自由土地党の他に、次のようなものがあった。「共和党」、「人民党」、「反ネブラスカ党」、「連合党」、「ノーナッシング党」、「ノーサムシング党」（反奴隷制ネイティヴィスト）、「メイン禁酒法党」、「禁酒党」、「ラム民主党」、「ヒンズー党」、「ハード・シェル民主党」、「ソフト・シェル」、「ハーフ・シェル」等々。これがまさに二大政党制崩壊の象徴であり、前述のボールドウィンが「政治革命」と呼んだ現象であった。

このような多様な勢力が如何に相違点を強調して独自性を誇りうるか、それとも逆に親和力を利して連合を結成しうるか。連合を形成しうるとして、いずれが優位を保った、或いはどれが中核となった新組織として出現するのであるか。主要勢力たる反奴隷制派とネイティヴィストがその鍵を握っていた。

この両者は「ライヴァルであると同時に、反民主党という点でより多くの共通点を有していた^⑦」。両者の闘うべき選挙地盤が同一であったことが、激突を避けさせた一因であった。今日からみれば、人種的弱者（黒人）への抑圧に反対した同じ人々が、同時に宗教的弱者（外国移民）の差別を好感するというのは可成り逆説的であるように思える。しかし歴史はしばしば非論理的であり、農村地帯のプロテスタント、ピューリタン志向の北部人の多くが反奴隷制と、禁酒と、ネイティヴィズムに共感し、愛飲家のアイルランド系カトリック教徒に非情だったのは事実である。

政治家たちはリパブリカン、ノーナッシング、禁酒派の支持を糾合して、勝てる政治コンビにしうる可能性のあることを知っていた。かくて1854年には、反奴隷制派とネイティヴィストが、対立するよりも共同するケースが多くみられたのである。

新国会議員が選出された時、ノーナッシングの支持を得て当選した議員121、反ネブラスカ法派として反奴隷制派の支持をうけて選ばれた者115という 数字

が一般に受容されている。約23名は反奴隷制だったがネイティヴィストではなかった。^⑧約29名がネイティヴィストだったが反奴隷制ではなかった（これらの多くは南部人であった）。しかしおよそ92名は反奴隷制であるとともに、ネイティヴィズムを伴っていた。

これを要するに、ネイティヴィストの大半は反奴隷制派であり、反奴隷派議員の大半は或る程度までネイティヴィストであった。換言すれば、反ネブラスカ法グループが下院で多数派であり、そしてまたノーナッシングも下院で多数派を形成していたとでも形容しなければならないのが実態であった。^⑨

この時点で反奴隷制主義とネイティヴィズムが強くリンクされていたことは明らかのようにみえる。解明されねばならぬ唯一の問題は、これら二力のうちいずれがコアリションの中で優位に立つかであった。それは同時に両者の同質性、異質性を問う作業でもある。

両者がリンクする可能性と、その理由はどこに見出せるか。両者間の親和力は、それが同一の宗教的、社会的有権者を共通地盤にしていることを別にしても顕著である。^⑩たとえば両者とも、陰謀的手段によってこの共和国の価値観を覆没させることを望んでいる強大な勢力の存在を信じ、それに対し恐怖と嫌悪とを表明する心理的同質性を有していた。

すなわちその一つは、「鞭を持った貴族」の奴隷主支配政治であり、いま一つは術策に長けた僧侶と老獪なジェスイットを持つローマ教会へのそれであった。両者とも奴隷主と僧侶の過度の性行為に嫌悪感を示し、宣伝材料にした。そして性の抑圧とそのタブー視が圧倒的にみられる時代にあっては、この悪の暴露は大衆の関心を惹いたのみならず、暴露自体が正当化された。従って反奴隷制派とネイティヴィストの運動の中で、僧侶の淫乱と奴隷主の人種混淆は格好のテーマであった。

純潔が危険にさらされること——それがムラトーであれ、処女尼僧であれ、改革を叫ぶ宣伝の中心テーマとなった。*Uncle Tom's Cabin* のハイポイントがムラトー少女の逃亡であるなら、*The Awful Disclosures of Maria Monk* のそれはモンリオールの一修道院からの尼僧の逃亡であった。後者は前者の売行きには及ばなかったが、当時のベストセラーの一つであったことは疑いな

い。そしてこの本がどう受け入れられたかは、それに対し「ノーナッシング主義の *Uncle Tom's Cabin*」という名称が附され大きな話題と注目の的になったことで知れよう。フィリップス (Wendell Phillips) は、奴隷主が全南部を「巨大な娼家」に化せしめたと非難する一方、結婚をしないカトリック僧侶は全合衆国を「広大な娼家」にしたと難詰した。彼の言はプロテスタント系のアメリカン・プロテスタント・ヴィンディケーター紙(1841年12月1日付)に大きくとりあげられた。ここでは奴隷主と僧侶が、アメリカの価値への侵害者として並列的、同質的に扱われていることが明白である。

ここに反奴隷制派とネイティヴィスト、或いは禁酒法派が結合する一つの環がある。しかしそれを認識することは、これら諸派間のプリンスiplの相違を不分明にすることにはつながらない。リンカーンは次のように相違点を述べてその存在を認めている。「ニグロの抑圧されるを嫌悪する者が如何にして白人の墮落するを歓迎しうるのであろうか……国家として我々は“すべての人は平等に創られた”と述べ出発した。我々は今や事実上、それを“ニグロを除くすべての人は平等に創られた”と読みかえている。ノーナッシングが支配権を握れば、それは“ニグロ、外国人およびカトリック教徒を除くすべての人は平等に創られた”と読みかえられるであろう」。

しかしこのように両者の合理的アピールが相違したとしても、その非合理的アピール、ことに高度の怖れや懸念を抱く人々へのそれは同一の効果を有した。このような状況下では、両者は相互支持的となる。しかし反面、両者の結合は極めて便宜的でもある。従ってリンカーンなどの共和党穏健派は、ノーナッシング主義を非としたにもかかわらず努めてその点については沈黙を守ろうとし、シュワードらの急進派はあからさまに期待と反感とを表明している。たとえば急進派の機関紙で、*Uncle Tom's Cabin* を連載したナショナル・イアラ紙の主筆ベイリーは、「ノーナッシング主義は我が自由制度に具現されている市民的自由および宗教的自由という基本的諸原理と相容れない」と非難した。

しかし両者が「完全に」反撥しあわない限り、次のような成行きが現出するであろう。すなわち反奴隷制政党は、少なくともその綱領の中にネイティヴィスト的項目を挿入しなければならず、ネイティヴィストの諸候補者を公認せね

ばならぬ。しかしネイティヴィストの支持を得ること——それは彼らの不寛容なる汚点を黙認または甘受するに等しい。その主義に反感を抱く人々に対し、その色彩を如何に薄めながら、どのようにノーナッシングを離反させずに済ませるか。

有権者の間にすでにそれを求める声が強かった。たとえばホブソンなる一人物は、デモクラットもノーナッシングをも許せなかったために、「ラム酒と奴隸制」の政党を選ぶか、「アイルランド人とドイツ人の選挙権を剝奪することにより創出される北部奴隸制」の体制を選ぶしか残らぬと嘆じている。ノーナッシングの結社そのものがカトリック教会の組織に類似しており、いずれも共和主義的原理に馴染まぬ、との批判が附加されていた^⑩。さらに共和党急進派はノーナッシングに期待を示しながら、その主張が過度であり不当とした。そのため自由にとっての真の危険物——Slave Power——を、彼らは等閑視しているからである、と。反奴隸制運動がその成功の最大好機を迎えているまさにこの時点で、逆にそれを頓挫させる「南部の陰謀」に加担するもの、とまで極論する急進派も少なくなかった。10余年にわたる彼らのゴールは、反奴隸制問題を全国的政治の焦点に据えることであり、ノーナッシング主義の過度の主張によりそれが妨害されることを欲しなかったのである。

以上が1855年12月に、国会が召集された時の状況であった。そして1856年大統領選挙が目前にあった。北部フロント結成が急がねばならない。しかしそれは如何にして成立し、如何なる人物を候補に立てうるであろうか。

大統領選挙が接近するにつれ、東部リパブリカンでさえ、民主党を打破するには多数の北部ノーナッシング票と結合せねばならぬことを悟った。リパブリカンは1856年秋までにノース・アメリカンの大半を、そして1860年までにはそのほとんどを吸収した。

しかし史家はリパブリカンが如何にして、この大戦果を得たかについては一致していない。奴隸制と地域間問題を強調した同党綱領に着目して、若干の史家は共和党はノーナッシングに譲歩することなくこの成果を得た、或いはネイティヴィズムと反カトリック主義は1850年代末の政治局面では政治的関心が失われていた、或いは何にもまして共和党はその反奴隸制、反南部的態度のゆえ

に、北部において圧倒的優位に立ちえた、等と論じている。

その支持的根拠として彼らは、ノーナッシングもまた奴隸制拡大問題をめぐって、南北兩派に分裂したことをあげる。1855年6月および1856年2月の二度にわたり、北部ノーナッシングは同党綱領が反ネブラスカ法および奴隸制拡大反対の強い条項を挿入しなかったとして、このアメリカ党全国大会から離脱した。その結果、同党はノース・アメリカンとサウス・アメリカンに分裂した。

そして1856年ノーナッシング党大会がフィルモアを大統領候補として支持した時、彼が第一義的に南部の推す人物であり、例の逃亡奴隸法に賛同した者として多くの北部人の間で不評を買っていたことが重大因となって、この離脱したノース・アメリカンは、北部アメリカ党大会をニューヨーク市で6月に開くことを決議した。それはまさに共和党がフィラデルフィアで大会を開く1週間前という期日であった。

ノース・アメリカンは、共和党が飲まざるをえないような独自の候補者を指名したいとしたが、実質的には1856年選挙において共和党の推すフレモントを支持した。かくてノース・アメリカンの離党理由からみて、奴隸制問題が、まさに合衆国を分断したと同じく、ノーナッシングを分裂させたことは否定の仕様がなない。またノース・アメリカンが奴隸制拡大に反対であったことも打消しがたい。しかしながら反奴隸制、或いは反カトリック感情のみでは、何故に共和党が北部における反民主党票の大半を吸収しえたかを説明しきれない。

ノーナッシング党の衰退と、反デモクラットの大政党としての共和党抬頭との関係は、共生的であった。ノーナッシング党の分裂は、同党が全国的政党設立に失敗したことを示すが、それはノース・アメリカンが自由州における大政党としての役割を共和党と競合する事情を生ぜしめる。この競合を複雑化させたのは、ネイティヴィズム、反ネブラスカ法、反民主党の感情が、しばしば同一人物内で融合併存していたという事実であった。

競合関係と共通点とが混在していた。両者とも専制的陰謀が共和政治を脅かすと解し、アメリカ人に自由への十字軍を呼びかけた。しかし全国的レベルにおける反ネブラスカ派の団結は、未だ十全でなかった。これらを背景としての諸党派の混乱状態は、第34国会が1855年12月に召集された時、明白となった。

この多岐な分裂をみて「国会議事録」の編集者は、国会議員の党籍分類をなすという従来の慣行を、さし控えたほどである。

アメリカ党がその新鮮味と、人民のための真の利益代表たる性格を失いつつあった時点で、共和党がそれを明示した。同党の誕生以来、その指導者たちは既成政党への一般人心の反感を認識していた。オハイオおよびインディアナにおける初期の反ネブラスカ連合は、「人民党」の名称を使用したし、1856年時点のコネチカット、さらに遅れてペンシルヴァニア、ニュージャージーでも同様名称が採用された。反奴隷制派政治家は、相互不信感を抱くホイッグ、デモクラット、フリーソイラーをできるだけ刺激せず、逆にひきつける名称を明らかに求めていた。リパブリカンが既成政党の政治家や政党メカニズムを嫌った多くの人々を吸収したのは、このような配慮を下敷にして開かれた1856年2月ピッツバーグにおける全国組織結成大会の会期中のことである。

しかしながら共和党にとって、これらのいわば「改革イメージ」よりも遙かに重視せねばならなかったのは、ノース・アメリカンの懐柔であった。1856年2月に離党したこれらノース・アメリカンは、共和党との如何なる連合においても対等であるべきことを求め、且つ反カトリシズムの尊重を主張した。

しかし共和党は、その原理を十全に採用しえなかった。なぜならそれはノーナッシングの秘密結社性を嫌悪した東部リパブリカンを疎外させ、また吸収したいと願うプロテスタント系ドイツ人やアイルランド人と敵対関係に入ることを意味したからである。これらのプロテスタント系移民は、アメリカ生れのプロテスタントよりもずっとカトリック系同国人を嫌悪していた。ネイティヴィズム、反カトリシズム、禁酒主義、そして反南部主義は、反民主党勢力を統一するよりも別々の方向にと走らせる独立的諸力であった。たとえばドイツ人が如何に奴隷制を嫌悪したからとて、ノーナッシング主義が優勢的であるような共和党には決して投票しないであろう——とは同党指導者チェイスに忠告した一同時代人の率直な感想であった。

如何にすればこれら反民主党勢力のすべてを単一政党に結合しうるか、その際各グループ間でなさるべき取引き乃至譲歩は何であるか。そのディレンマの現実的例であり、同時にその難問への解答ともなるのが、共通の大統領候補選

出作業であった。

ノース・アメリカンは、最初ニューヨークにおいて独自の候補を指名し、5日後にフィラデルフィアで全国大会を持つ共和党にそれを押しつけようと企てていた。一方、共和党の戦略は、ネイティヴィズムに汚染されていない候補者を立てた上で、なおノーナッシングの支持が得られるような方途を探ることに絞られていた。彼らはこの成果を、下院議長にマサチューセッツのバンクス(Nathaniel P. Banks)を選出することで獲得した。彼を当選させるに至った長い闘争が、如何に北部における反奴隷制感情を奮起させるに有用であったか、そしてそれが共和党国会議員による固い組織結成に資し、ノーナッシング国会議員の全国的政党結成を阻止したか、が指摘されたのは、一世代以上も前の史家による。バンクスを議長職に就かせえたのは、まさに「北部の最初の勝利」であった。

バンクスは、かつてのデモクラットであり、ついでノーナッシング主義に賛同し、この時点では明らかにリパブリカンであった。そのような経歴のゆえに、彼はどの派からも支持を集めるに最適の人物であった。彼は最終的計画を誰にも明かさず、先ず大統領候補としてノース・アメリカンの指名を得、そして共和大会が開かれるまで受諾を遅延させた。共和党がフレモントを選出した後、彼はノーナッシングの指名を事前の計画に従って辞退し、ノーナッシングにフレモント支持を要請した。この期になってはノーナッシングもそれに従う以外に道はなかった。フレモントはこのようにして、ノーナッシングの候補者も兼ねることになったのである。まさにバンクスは、ネイティヴィズムと反奴隷制主義とのリンクを「人間として」具現化した存在であった。

功労者バンクスを下院議長に当選させたネイティヴィストと反ネブラスカ派の連合が、少数の例外を除いては、第一義的に反奴隷制への傾斜と忠誠を深め、かくて共和党強化に力を与えた。ペイリーはこの状況を次のように述べている。「リパブリカンとしてよりも“アメリカン”として当地に來た若干の人々は、今やアメリカンであるよりもリパブリカンである」、と。

かくてネイティヴィスト＝反奴隷制派連合は、ネイティヴィズム最小、反奴隷制主義最大で作動するに至った。同時にこの議長選挙は、国会内のルーズな

反ネブラスカ連合をして、統一的且つ恒久的組織への長い道程の第一歩を踏み出させたのである。その連合組織内で、ノーナッシングが共和党の大統領候補であるフレモントを飲んだことの意味は明瞭であろう。

一史家はこれらの推移、駁引き、その結果の重要性を次のように概括している。「1856年2月という月、ここでバンクスが選出されたことが共和党発展史における旋回点である」、「この議長選挙戦が、共和党をナショナルでネイティヴィストの政党にではなく、セクショナルで反奴隷制の党に仕立てるのを助長した」、と。また1856年にノーナッシング党を全国的政党として組織しようと奮闘していたニューヨーク州選出下院議員ヘイヴン (G.G. Haven) は、カンザスをめぐる論争が、従って奴隷制問題が南北のネイティヴィストを分裂させてしまったこと、その結果、「多くのノーナッシング議員が恰も共和党員の如くに振舞っている」と嘆いた。^②

「1856年共和党全国綱領は、ネイティヴィストにとって大敗北であった」。^③この行文は、ノーナッシング党の衰退もしくはその政治史的意義と、1856年共和党綱領の考察を求めたものとして受けとられるべきものであろう。^④

ノーナッシング運動は、独立した政治勢力としては短命であった。それは地域間闘争の暗礁により打破された。すなわち前述した如く、1855年には次の大統領選挙で勝つ可能性さえ持っていた。しかし今や1856年選挙では、ノーナッシングの選択はすでにサウス・アメリカンが指名しており、米国旗団員としての資格さえ疑わしいフィルモアか、それとも共和党が指名しノース・アメリカンが是認した人物フレモント（彼がノーナッシングでないのは当時、周知の事実であった）のいずれを採るかであった。これが偉大なノーナッシング運動の、竜頭蛇尾の終末である。

今や反奴隷制政党が北部における支配的政党として、明白にだが「幾分、予期せぬ」状況の中から出現してきた。かくて今日的視点からすれば、アメリカ政治史におけるノーナッシング局面は、ホイッグ党から共和党への転化において、一種の仲介的段階として資したことが判明する。このことを前世紀末の史家は次のように表現する。ノーナッシング党は「共和党への道を準備」した時「その歴史的使命を果たした」のであり、「同党が抱えている唯一の課題は、今

や死滅することである」、と。^⑩

また今世紀の指導的史家の一人は言う、「有権者たちがノーナッシング主義から離反することは確実であった」。なぜなら「アメリカの生活における絶対的に基本的な要素は、国家および宗教への寛容であるから」、と。^⑪

しかし事實は、移民や少数グループへの差別的態度は決して消失しなかった。それらは歴然たる政治的形態として表現されるのを、さし控えられたにすぎない。従って、今日の史家はよりスケプチカルであり、ネイティヴィズムは本質的に一時的な現象であり、奴隸制問題はより永続的な現象であったとの主張に再び魅力を感じているようにもみえる。

さらに最近の史家は、同党をアメリカの政治史の伝統に乗せて、この国では如何なる「単一理念的」な政治運動も成功しないとし、ノーナッシング運動は「そのような政治運動と同じ運命を味わった」と主張する。「この党の運動は他の単一理念的の運動と同じく、恒久的な追従者をひきつけるに十分なものを、このような複雑な社会内において提供しなかった」。従って「それらの運動の持つアイディアの最良部分が、他の運動によってより大きな論争、問題の一部として組みこまれる」結果となった、としている。^⑫その他、ノーナッシングの低落因を、同党の持つ秘密結社の性格、暴力的行為に帰す史家も見うけることができる。^⑬

とまれ1856年以後（この年たとえ大統領候補をたてたとはいえ）、ノーナッシング党は死滅した。しかしネイティヴィズムが霧消したわけではない。その公的組織は消えたが、強大な勢力として留まり、事実ホイッグ党员とともに共和党に流入していった。そしてそれにより、共和党は1860年にリンカーンを当選させる力をネイティヴィストの支持の中に見出したのみならず、以後1世紀以上もの間の諸選挙で、同党勢力の重要因子としてありつづけたのである。

一方、ノーナッシングは余りにも率直にすぎたため、却って自らの手を縛る羽目に陥った。すなわち人々は関税の率や奴隸制問題にも関心を持つ一方で、移民の恐怖とそれへの憎悪を抱くことができた。ノーナッシングは、自己の党内にそのような様々な政治グループが存在することを知り、分裂を怖れて他の諸問題について強い立場をとることを躊躇した。従って多くのノース・アメリ

カン、新生の共和党が他の問題を取りあげただけでなく、ネイティヴィズムの「色合い」を採った時、自らの党を離れていったのである。

しかしその時点までに、ノーナッシングは政治的変容の進展に大いに資していた。彼らはホイッグ党のみならず、民主党も同じく揺さぶって、旧来の党機構に大打撃を与えていた。そのため依るべき党を失った「これらの人々をして今や共和党以外には行くべき所を持たぬ」条件を作出していた。逆に共和党はそのゆえに、ネイティヴィストの支持というパイを如何なる公式譲歩をすることなく食しえたのである。

そのことを1856年6月に提案された共和党全国綱領によって確かめてみる。その最終簡条の後半部分は次の如くである。「我が国の憲法ならびに諸制度の精神は、良心の自由および市民の間における権利の平等を保証していると信ずるがゆえに、我々はその安寧を損なうすべての律法に反対する^⑤」。この条項は通常、共和党内のノーナッシング主義を払拭したドイツ系移民の勝利と解されている。そして或る程度までは、後述する如く、それは真である。

しかし同条項は、外国人についてではなく「市民」に言及しているのであり、「良心の自由」も、公立学校における聖書問題を論ずる際、ノーナッシングおよび反カトリック派が常用した語句であることを銘記せねばならない。彼らにとって良心の自由とは、僧侶の圧力排除、聖書の個人的解釈の権利を意味した。従って、この条項は両様に解しえて、ネイティヴィズムと、宗教的、民族的寛容の双方を睨んだものと言えよう。共和党は公的にネイティヴィズムに譲歩しなかったし、同時に反奴隷制派移民にも「十全の」満足は与えていない。

シンシナティおよび各地の反奴隷制派ドイツ人が、共和党にはネイティヴィズムと禁酒主義の色彩ありとして支持をさし控えたことでそれが如実にうかがえる。しかし同時に、共和党諸候補者の中では最も外国人に攻撃的でないと信じられていたフレモントが指名されたことと相俟ち、若干のドイツ系共和党員が同条項を「生え抜きのアメリカ人にとっては、飲みくだし難い小さな丸薬^⑥」と評価して、戦列に加わったのも事実である。

かくて1856年選挙は州毎に異なった戦術をみせながら、ほとんどすべての州で「奴隷制拡大反対」を圧倒的問題として展開された。オハイオ州知事チェイ

スは、ミシガンのビンハム知事に選挙戦勝利の計画を次のように摘記して、その争点を示している。「我々は奴隷制か自由かという単一の問題に絞こむことによってのみ、次の大統領選挙に勝てるように思います。我々には自由なアメリカ人、反奴隷制を採る市民が必要であります」。

政党再編成のプロセスは、1856年大統領選挙で完成に達した。この選挙を概観することによって、新しく塗られた政界地図と、次回(1860年)大統領選挙の局面予測を立てておこう。大統領候補は周知の如く、サウス・アメリカンとホイッグ残党に指名されたフィルモア、民主党に指名されたブキャナン、そして第一義的にはリパブリカン、二次的にノース・アメリカンにより指名されたフレモントの三人であった。

三候補、三すくみの大統領選挙はアメリカ政治史上、余り例が多くないが、同時に奇妙な得票パターンを形成する。1856年選挙も例外ではない。表面、三人の争いだが、事実上は二つの異なった選挙が同時に戦われた——自由州ではブキャナンとフレモントの間、奴隷州ではフィルモアとブキャナンの間での闘争がそれである。

フィルモアは自由州を一つだに制しなかった、僅かに第二位につけたのはカリフォルニア1州のみであった。彼はニュージャージーでは総投票数の24%、出身州ニューヨークでは21%、ペンシルヴァニアでは13%を得票した。他の6自由州では5%以下にすぎない。要約するに、フレモントとブキャナンが自由州の86%を分けあったのである。他方、奴隷州ではフレモントはデラウェア、メリランド、ヴァージニア、ケンタッキーを除いて公認選挙候補者名簿にすらならず、この4州の中でもデラウェアで1%を得たにすぎない。

従って奴隷州においては、選挙戦は全くフィルモアとブキャナンの間で戦われた。前者はメリランド1州のみを制した。しかしスコットが、かつてミズーリ、メリランドで得た票、それにジョージアからテキサスに至る低南部各州でスコットよりも高率の一般投票を獲得し、実質的な力の伸張を示した。結局、フィルモアは奴隷州10州で40%以上を集票し、ミズーリとテキサスでは彼ほどの前ホイッグ党候補よりも大量得票したのである(第二表参照)。

ブキャナンは或る意味で不利な戦いを強いられた。なぜなら彼は南北両セク

第二表 大統領選舉一般投票(1848年~60年)

Compiled from Clifford L. Lord and Elizabeth H. Lord, *Historical Atlas of the United States* (1955), p. 202.

— 56 —

要するに、叙上の選挙パターンは1850年妥協以後、はじめて多くの有権者がユニオンの安全への脅威が広汎に存在するを感じながら投票に臨んだ選挙戦だったと言える。

次に三者の掲げた選挙公約を概観する。いずれも疑いもなく「テリトリーにおける奴隸制」問題が主題であった。

この点に関し、民主党は「国会不介入説」を採用した。「州、准州およびコロムビア特別区における奴隸制に、国会は干渉すべきでない」。それはすでに別の機会で述べた如く、ダグラスの「住民主権論」（それ自体、玉虫色だが）なのか、南部カルフーン派の、より厳密な「国会不介入説」なのかは、政治的配慮として隠蔽されていた。

アメリカ党の綱領は、ミズーリ協定撤廃を非難していた。しかしその回復を約してはいなかった。そして民主党と同じく、住民主権論の多義性を有権者に提示していた。

しかし共和党は、奴隸制と一夫多妻制を「野蕃の双生児的遺物」と非難し、^④国会はすべてのテリトリーからその両者を排除する権利と義務を有すると主張した。それは明らかにウイルモット条項の立場であり、1850年大妥協の中心条項を廃棄するものであった。

このことは、ブキャナンが敗れフレモントが制勝すれば、南部諸州分離の可能性が大きく浮上することを意味する。^④事実そのような懸念が、ブキャナンに南部票をより集中させ、北部でもフレモントを警戒する動きを伴って可成りの票を失わせた。ストップ・フレモント運動が、ユニオンの危機を背景に、ブキャナン勝利をもたらしたとされている。^④鍵を握る州は、ブキャナンの出身州ペンシルヴァニアであり、従って精力と金銭とがそれだけ余計に集中された。ここで制勝することにより、彼は第15代大統領となった。^④

この選挙戦を通じてみられた大妥協感情の消失とセクショナリズムの再登場を、いま一度投票分析によって確認しておこう。ブキャナンは、奴隸州ではフィルモアと対抗し、メリランド1州を失ったのみで圧勝した。しかし自由州では、フレモントと争って敗れた。彼が制したのは、ペンシルヴァニア、ニュージャージー、イリノイ、インディアナ、カリフォルニアの5州にすぎず、フレ

メントが他の11州を得たからである。獲得した大統領選挙人で表現すれば、ブキャナンは178、フレモント114、フィルモア8であり、一般投票ではフレモント33%、フィルモア21%に対し、大統領ブキャナンは45%強を得たにすぎない。さらにセクション別のそれを算出すれば、自由州でフレモントは45.2%、ブキャナン41.4%、フィルモア13.4%であり、奴隷州ではそれぞれ0.0005%、56.1%、43.9%であった。^④

この極めて地域偏在的な得票ぶりと、さらに次の諸事実を重ねあわせると、セクションナリズムのほとんどの完成が看取される。すなわちオハイオを除いてフレモントが得た11自由州すべては、ブキャナンの制した20州よりも遙かに以北であったという事実、第二にブキャナンの勝利は、フレモントが北部で優勢であった以上にブキャナンの南部における優勢ぶりが、より圧倒的だったことによるという事実である。

しかし共和党は、この敗戦を「勝利の敗北」と評価した。なぜなら次期大統領選挙で、もし彼らがペンシルヴァニアを加えるか、或いはインディアナ、イリノイのいずれかを加えれば制勝しうるからであった。デモクラットは、共和党の「セクションナリズム」を非難した。しかし彼らの地域間均衡の性格も痛く損傷していた。ブキャナンが全国的候補としての任を果たしたものの、既述の如く、民主党が国会において完全に南部派に牛耳られていたことが、その何よりの証拠である。かくて全国的政党は、最早や次の1860年には見られないであろう。

（註）

- ① Silbey, *Transformation*, p. 8.
- ② Holt, *Political Crisis*, p. 170; Foner, *op. cit.*, pp. 237-238.
- ③ Potter, *Impending Crisis*, pp. 249-250.
- ④ Foner, *op. cit.*, p. 237.
- ⑤ 共和党の起源については次をみよ。 *Ibid.*, pp. 226-260; Don E. Fehrenbacher, *Prelude to Greatness: Lincoln in the 1850's* (1962), pp. 19-47; Binkley, *op. cit.*, pp. 206-221.
- ⑥ Potter, *Impending Crisis*, p. 248.

- ⑦ Holt, *Political Crisis*, p. 172. 傍点引用者。
- ⑧ Potter, *Impending Crisis*, p. 251.
- ⑨ この数字をあげた根拠として、ポッターは1856年4月4日、テネシー州選出 S.A. スミス下院議員の行ったスピーチに基づくとしている。*Ibid.* また次もみよ。*Cong. Globe*, 34 Cong., 1 Sess., App., p. 352.
- ⑩ Foner, *op. cit.*, Chapter 7 “The Republicans and Nativism,” pp. 226-268.
- ⑪ Silbey, *Transformation*, pp. 10-11; Potter, *Impending Crisis*, p. 252. 修道院や教会に収容されているプロテスタントの少女を救出するとの口実で、それらの施設への不法侵入、暴力行為が一再ならざみられた。
- ⑫ Lincoln to Joshua Speed, August 24, 1855, in Roy P. Basler (ed.), *The Collected Works of Abraham Lincoln* (8 vols., 1953), II, pp. 320-323.
- ⑬ 「禁酒運動家、反奴隷制派、ホイッグ、北部ノーナッシングの間には……自然的共感が存在する」。Nevins, *Ordeal*, II, pp. 329-331.
- ⑭ *National Era*, November 30, 1854, quoted in Foner, *op. cit.*, pp. 232-233.
- ⑮ Holt, *Political Crisis*, p. 171.
- ⑯ Foner, *op. cit.*, pp. 233-234.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 226-260.
- ⑱ Potter, *Impending Crisis*, pp. 254-255.
- ⑲ 同党が全国的政党としてありつづけること、換言すれば同党が全国的政治の場に公式に出る際、必然的かつ不可避免的にカンザス・ネブラスカ法に対する立場を明らかにせざるをえぬ。それが同党分裂の因となった。特に綱領中、有名な第12項(現存する諸法律は、奴隷制問題の最終的解決策として是認されねばならぬとする文言——それはカンザス・ネブラスカ法さらには逃亡奴隷法の間接的是認条項である)が、それであつたとされる。*Ibid.*
- ⑳ Holt, *Political Crisis*, pp. 171-172.
- ㉑ Potter, *Impending Crisis*, p. 255.
- ㉒ Holt, *Political Crisis*, p. 175.
- ㉓ *Ibid.*, pp. 176-177.
- ㉔ 期間も長かったが、投票回数も例の大妥協直前のユニオンの危機時(1849年～50年)の場合と同じく、異例の回数に及んだ。パンクスは133回目の投票で、サウスカロライナの W. エイケン の100に対し103の票を得た。11票は他候補への散票であつた。*Congressional Quarterly's Guide to the Congress of the*

United States. Origins, History and Procedure (1971), pp. 37-38. 諸候補への投票については次をみよ。*Cong. Globe*, 34 Cong., 1 Sess., pp. 86, 174, 231, 242-245, 306, 308, 313, 315, 326, 1043.

- ②⑤ Fred H. Harrington, "The First Northern Victory," *Journal of Southern History*, V (1939), pp. 186-205. 同様主旨の最近の研究については次をみよ。Foner, *op. cit.*, pp. 247-250; Potter, *Impending Crisis*, pp. 256-257; Holt, *Political Crisis*, p. 177.
- ②⑥ Gamaliel Bailey to Charles Francis Adams, January 20, 1856, quoted in Foner, *op. cit.*, p. 247.
- ②⑦ *Ibid.*, pp. 247-248. しかしながら共和党は全国候補(大統領候補)フレモント支持に対するノーナッシングへの見返りとして、地方選挙では彼らに譲歩したり支援を送ったりしている。若干の史家の否定にもかかわらず、そのことは少なくともマサチューセッツとミシガンでは確認しうる。Holt, *Political Crisis*, p. 178; Silbey, *Transformation*, p. 66.
- ②⑧ Foner, *op. cit.*, p. 248.
- ②⑨ 勿論、ネイティヴィストは自らフィルモアを大統領候補に立て、全国綱領も作成している。それはアメリカ人にアメリカの危険についての関心を呼びおこし、アメリカ人がアメリカを支配すべきことを主張したもの、と約言できる。American (Know Nothing) Platform of 1856, in Porter and Johnson (eds.), *National Party Platforms*, pp. 22-23.
- ③⑩ H.E. von Holst, *The Constitutional and Political History of the United States* (8 vols., 1876-1892), V, p. 198.
- ③⑪ Nevins, *Ordeal*, II, p. 331.
- ③⑫ Silbey, *Transformation*, p. 13.
- ③⑬ Holt, *Political Crisis*, pp. 173-174.
- ③⑭ Potter, *Impending Crisis*, p. 259; Foner, *op. cit.*, pp. 249-250.
- ③⑮ Silbey, *Transformation*, p. 14.
- ③⑯ Porter and Johnson (eds.), *National Party Platforms*, p. 28.
- ③⑰ Foner, *op. cit.*, pp. 248-249; Holt, *Political Crisis*, pp. 178-179.
- ③⑱ Foner, *op. cit.*, p. 249. 傍点引用者。
- ③⑲ この選考は難航した。ブキャナンの他に、ピアス、ダグラスが南部側の好感する候補者として推されたからである。結局、17回目の投票で政治的ヴェテラン

のブキャナンが指名された。この民主党大会については次が詳しい。Roy F. Nichols, *The Disruption of American Democracy* (1948), pp. 2-18.

- ④① Porter and Johnson (eds.), *National Party Platforms*, p. 27. なお前出の *Uncle Tom's Cabin* と *Maria Monk* のいずれもが、そのように扱われたことを想起されたい。
- ④② フレモント当選の際には、南部分離の意図が実在した諸証左については次をみよ。Avery O. Craven, *The Growth of Southern Nationalism, 1848-1861* (1953), pp. 243-244; Nevins, *Ordeal*, II, pp. 497-500.
- ④③ この運動の重要性については次をみよ。 *Ibid.*, pp. 491-492.
- ④④ *Ibid.*, pp. 505-507; Nichols, *op. cit.*, pp. 41-50.
- ④⑤ 前掲第二表。次も参照されたい。Potter, *Impending Crisis*, p. 264 note 83.

（六） む す び

確かに新生の、そしてセクショナルな共和党は大健闘した。しかし共和党が綱領にくるんで戦った戦略と、幾百千の有権者が1855年以後、何故に共和党の下に連合したかの理由とは区別して考えねばならない。投票者は、支持政党のリーダーの理念とはしばしば異なった理由で、その党を支持することがある。また或る党を支持するのは、強い支持理由によるよりも、反対党への敵対心のゆえに、その挙に出ることもある。このことは特に1850年代の政治にあてはまる。1854年と55年では、ネイティヴィズムと反カトリシズムが、ノーナッシングの旗の下に反民主党勢力として多くの有権者をひきつけた。1856年、彼らはカトリックの陰謀の機関だと思倣していた民主党を、共和党が打破しそうな機会を感じとった時、そして共和党員が地方レヴェルにおいてローマニズムを再三非難した時、その党に加わったのである。

しかし反カトリシズムのみが有権者をして共和党に赴かせた原因ではない。ノース・アメリカンとプロテスタント系移民もまた、反南部的であった。さらに幾百千の他のリパブリカンも、決してノーナッシングの経歴を持ったこともなかった。反カトリシズムは衰退しなかったが、より銘記すべきは、北部にお

いて反民主党の一大政党になったのは、ノーナッシングではなくリパブリカンであり、しかも同党は地域間問題——テリトリーにおける奴隷制——を強調していたことである。

共和党指導者は、排他的に北部政党が必要であることを北部人に植えつける努力の方を選んだ。1854年および1855年とは異なり、1856年が大統領選挙の年であったという紛れもない事実が、南北双方をして相互に闘争の強度を増し、中央政府支配を願う気持ちを増大させたのは明白である。

しかしながら窮極的に、共和党が1856年にはノーナッシング党を、1860年には民主党を制した理由を説明するに当って、最も重要なポイントは次の如くであろう。すなわち同党は“Slave Power”の攻撃に抗するには、「北部政党」が真に必要であると有権者の説得に成功したことである。

そのアピールの説得性は従って、Slave Power^①の陰謀が、北部を従属化せしめんとしている一連の具体的事件の上に存立していた。たとえば、カンザス・ネブラスカ法そのものが、多くの北部人にその脅威の現実性を感じしめた。しかしそれだけでは優勝政党を築くには十分でなかった。共和党が北部で、そして全国で制勝するに必要なのは、さらに一連の事象——たとえばドレッド・スコット判決、ホームステッド法、低率関税等——が、対南部敵意を駆きたててくれることであつた。

これら一連の諸事象、そして共和党がそれを利用する物語、そして南部が共和党に反応する物語が、アメリカ史上でも稀な政治の両極化を生みだし、セクショナリズムを高めたかを語っている。そして如何に両セクションが、同一政党の枠内で協働しえないほどに両極化したかが示される。南部は、いやます北部の勢力に脅威を覚え、北部は Slave Power の陰謀がますます確実であると信じるに至った。この地域間闘争こそ、共和党が多様な北部の反民主党分子を結合しえた理由であり、同時にやがては南部が分離を決意する理由でもあった。

（註）

① Holt, *Political Crisis*, pp. 180-181.